ISSN 2188—2789

RITSUMEIKAN

インクルーシブ社会研究 10
Studies for Inclusive Society 10

ケアメン・コミュニティのマネジメント

Management of Male Caregivers' Community

編集担当：津止正敏
Editor: Masatoshi Tsudome

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
「インクルーシブ社会に向けた支援の＜学＝実＞連環型研究」
社会的包摂に向けた伴走的支援の研究チーム
Translational Studies for Inclusive Society:
MEXT-Supported Program for the Strategic Research Foundation at Private Universities
Research on Escorted Support for Inclusive Society Team

2016年2月

立命館大学人間科学研究所
Institute of Human Sciences, Ritsumeikan University

刊行にあたって

昨年9月、夏季休暇を利用して学生たちと一緒に四国の香川県の男性介護者の会を訪ねた。その名も「さぬき男介護友の会」(代表・九十九芳明氏)。介護する男性の介護実態とその会の活動の実際を伺おうと現地に足を運んでみた。介護と仕事の両立の困難を訴える人、認知症の妻と暮らしているがこの会に入って「ひとりじゃないんだ」と気持ちが楽になったと語る人、妻の介護、親の介護だけでなく叔父叔母の介護を担う男性もいた。ひと通り自己紹介が終わったころオブザーバーで参加していた女性が男性の介護者の特徴について次のように話してくれた。SOSの発信が苦手、男性は逃げない、仕事のように介護しようとする、子育ての経験がない、被介護者を自分と一体のように思う人がいる、というのだ。「男らしい」多くの介護者との交流があったからこそ感じた男性介護者像なのだろう。「一生懸命だけど心配な介護者」という指摘に共感しながら耳を傾けた。

この会は4年前の2001年4月に発足して会員は現在10名余りというが、同様の会は今全国に100か所以上にまで広がっている。みんな大人数ではなく小さな集まりだ。私が事務局長を務める「男性介護者と支援者の全国ネットワーク」が発足したのが2009年3月だが、それ以降に発足した会や集いがほとんどを占めている。イクメンに倣って自らを「ケアメン」と称する会や集いだって少なくない。

会の歴史が新しいだけに、その運営かくあるべしという確たる知見もこの社会に蓄積されているわけでもない。会員の募集や会や集いの周知・広報、定例化、会場の確保、例会の運営やそこでのプログラムの選択、事務局機能や支援者・スタッフの確保、入退会など入れ替わりの激しい会員・参加者の状況把握や管理、行政や社協等との連絡、介護環境の改善のための社会啓発等々その課題は数え上げたらキリがない。介護の仲間づくりというささやかな願いもこうした課題を前にすれば一声一歩を踏み出す気力さえも萎えてしまいかねない難題かもしれない。しかし、それでもなお、全国各地では介護する男性たちの産声が今も上がっているというのだ。難しい課題をも乗り越え得るような希望の光がそこに宿っているからではないか。小さいが、無限の宇宙に連なる可能性

を実感するからではないか。

本書は、こうした問題意識を持って 2015 年 3 月 7 日に開催された、「男性介護者と支援者の全国ネットワーク」と人間科学研究所（文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「インクルーシブ社会に向けた支援の＜学＝実＞連環型研究」の一環として）の共催で開催された男性介護シンポジウム「ケアメン・コミュニティのマネジメント」の記録である。介護する男性たちの会や集いで醸成される立場を同じくする者たちの共感やそこに吸引される支援する友人・知人・援助職との連帯の拡がり、そして介護する側される側の環境改善に向かう運動の萌芽等々を「ケアメン・コミュニティ」と措定してみた。短い時間での意見交換だったが、そこでは辛さ暗さだけが際立つようなこの社会の介護に、灯りを灯すような胸を打つエピソードが幾つも幾つも語られた。各地のケアメン･コミュニティで日々生成されているこうしたエピソードを拾い集め、私たちの共有の財産にしていくこと、蓄積していくボックスを構築していくこと、このことを痛感させられたシンポジウムともなった。

最後に、基調のご講演を頂いた太田貞二氏と、遠方より貴重な実践報告を頂いた井口希代子氏、井出里美氏、戎世伊次氏、堀本平氏、そして本誌への掲載を快く許可頂いた男性介護者と支援者の全国ネットワーク、そして長きにわたって変わらぬご支援を頂いている公益財団法人キリン福祉財団に対し、心から感謝申し上げたい。

2016 年 2 月 20 日

立命館大学　津止正敏

目　　次

刊行にあたって…… 1

第１部　〈基調講演〉 …… 5
オヤジの会 20 年に学ぶ―日本初の男性介護者の会の活動から―
太田　貞司

資料　(1)「20 年のあゆみ」
(2) 長島明子「オヤジたちへの賛歌」

第２部　〈男性介護シンポジウム〉
Ⅰ．シンポジウム「ケアメン・コミュニティのマネジメント」…… 30

はじめに―シンポジウムの開催にあたって―　斎藤　真緒

1. 支援者ネットワークがサポートするケアメングループの運営
―長野県伊那市の「男介護もいいんだに」の取り組み―
井口希代子

2. 社会福祉協議会のケアマネージャーが支援する男性介護者の会
―長野県御代田町のケアメングループの実践―
井出　里美

3. 介護する男性が主宰するケアメングループ
―広島市安佐南区「4 木の会」の取り組みから―
戎　世伊次

4. 認知症の人と家族の会がサポートする男性介護者の会
―熊本県「ケアメンのつどい」の経験から―
堀本　平

Ⅱ．シンポジウムでの「質疑応答」に際して…… 74
はじめに
津止　正敏

1. 発題者とも質疑応答（質問票をもとに）
(1) 発題者への質問内容の紹介
(2) 男はしゃべらない！？
(3) 息子介護者の仕事のこと
(4) 会の運営に係る費用
(5) 参加者の送迎のこと
(6) 集いでの食事会やアルコールは？
(7) 支援者のネットワークのこと
(8) 会や集いに「来ない」「来れない」人への対応
(9)「医療生協」って？
(10) 会や集いへのアクセス―送迎の必要性―
(11) 行政など援助機関との関係
(12) 介護トーク
(13) 介護者が集いを主宰する場合の工夫と苦労

2. フロアとの質疑応答
(1) ケアマネージャーの支援について
(2)「仕事と介護」「介護と家計」―生活困難を抱える介護者の課題―
(3) 介護者の健康問題
(4) 家族・介護者への支援の必要性
(5) 会や集いが沸騰する「話題」「テーマ」
(6)「介護感情の両価性」への気付きの支援
(7) 介護者目線での支援

Ⅲ．ケアメン・コミュニティのマネジメントと支援の課題…… 101
―シンポジウムのまとめにかえて―
津止　正敏

〈資料〉…… 105
男性介護者と支援者の全国ネットワークの記録
男性介護者と支援者の全国ネットワーク会則

第１部

「基調講演」

オヤジの会 20 年に学ぶ
―日本初の男性介護者の会の活動から―

聖隷クリストファー大学教授　太田　貞司

内山順夫（男性介護者と支援者の全国ネットワーク副代表）

本日の講師の太田貞司先生をご紹介したいと思います。先生は、現在、男性介護ネットの顧問で、浜松にございます聖隷クリストファー大学の教授でいらっしゃいます、太田貞司先生に「荒川オヤジの会 20 年に学ぶ－日本初の男性介護者の会の活動から－」という題で、ご講演を頂きます。先生、よろしくお願いいたします。大田先生は、三十数年前、荒川区の保健所の非常勤の医療ソーシャルワーカーでありました。保健所に医療ソーシャルワーカーがいるというのは、その当時は荒川区だけだったと思っております。私もその頃から社会福祉協議会に勤めておりましたので、一緒にいろいろお仕事をさせていただきました。先生から「介護事件を絶対に起こさないようにしよう。特に男性の介護者の場合、いろいろと問題があるんだよね」と言われて、私はその言葉に非常に触発されました。その後、先生の後任の医療ソーシャルワーカーが、この男性介護者の会を立ち上げたという話になります。現在も、荒川区の介護保険の委員会の委員長ですとか、あるいは社会福祉協議会の地域活動計画の策定の推進について、いろいろとご活躍いただいているところでございます。荒川区には、どっぷりと縁のある先生でございます。ソーシャルワーカーが、オヤジの会 20 年になったということで、当時のことも振り返って頂きながらご講演いただきます。よろしくお願いいたします。

1. 荒川区「オヤジの会」の誕生

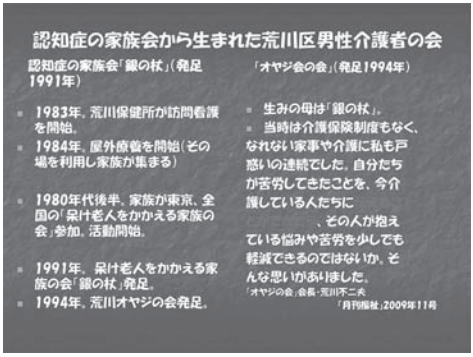
ただいまご紹介を頂きました太田貞司と申します。よろしくお願いします。

記念講演というお話を頂いた時、私に記念講演をする資格があるのかどうかと思いながらお引き受けいたしました。というのは、副代表から大変ご丁寧な

ご紹介を頂きましたけれども、私は荒川区の保健所で1982年から約9年間、神経難病患者や高齢者の在宅ケアを担当する非常勤の医療ソーシャルワーカーの仕事をさせて頂いておりました。その保健所のころですが、1980年代の中ごろと思いますが、荒川不二夫会長や内山順夫副代表と出会い、一緒に介護者の問題を考えるようになりました。ですから、私が今まで荒川で学んだことを今日はお話ししたいと思ってきました。

私がいちばん思うのは、「なぜ、オヤジの会が続いてきたのだろうか」、「何がその力だったのか」ということです。荒川会長に励まされてこれまでいろいろやってきましたが、それは何だったのかということです。そして、それを次の時代にどう引き継いだらいいのかというところです。私の思い付くままですが、お聞き頂ければ有難いと思います。

2. 発足の背景



まず、「オヤジの会」の発足の背景からお話ししたいと思います。「オヤジの会」は荒川区の「銀の杖」(認知症の人とその家族の会)が“生みの母”です。荒川区に「銀の杖」が生まれたのは1991年のことです。それは、京都で認知症の家族の会が生まれて10年ほどしてからのことです。その3年後の1994年に、「銀の杖」から「オヤジの会」が生まれました。

1994年の夏のことですが、もうお亡くなりになった方もおりますけれども、男性家族介護者として荒川会長をはじめ何人かと、今日はお見えでないのですが、先ほど副代表がお話されましたが、私の後任の荒川保健所の医療ソーシャルワーカーの長島明子さん、今日ここにおられる荒川区の訪問看護師の松村美枝子さんが支援者の立場で、荒川区の区役所の食堂にあつまり、「会」をつくろうと話し合いました。荒川会長等は「銀の杖」の活動に参加していたのですが、男性介護者の独自の問題もあり、男性だけで集まることも大事ではないか、

という思いがありました。そして、荒川区社協の内山さんも巻き込んで、同じ年の秋に第1回目の「オヤジの会」の集まりをもとうということになりました。

でも、「男性はあまりしゃべらないので、お酒がないと駄目なのではないか」ということになりました。そこで、会場を保健所の近くの居酒屋『圓太』としました。これが「オヤジの会」の出発点になった訳です。

当時の、1990年代の初頭というのは、いろいろな面で大きな時代の変わり目でした。ちょうどゴールドプランが始まったころです。また、介護保険制度創設の議論も始まっていました。議論の中で、家族介護者の介護負担の問題が盛んに議論されるようになっていました。ですけれども、まだ介護者一人一人の問題とか、また男性介護者の問題には、目が届かなかった時代でした。こうした中で、「オヤジの会」が生まれました。

3. 介護体験を伝える

荒川会長が『月刊福祉』(2009年11月号)にお書きになっておりますけれども、荒川会長たちは「オヤジの会」を、「私たちの介護を伝える」という思いでつくられたと言っています。

このメッセージは、多くの人に非常によく、はっきりと伝わりました。他の人に、次の人に伝えようという思いです。このメッセージが伝わったということが、「オヤジの会」自身の大きな励ましにもなりました。この思いは、今も続いていると思います。

そして、そのためには、どうしても「話し合える場」が必要なわけです。そうした場を欲しいということになりました。また、その思いの中には、荒川区の中で、介護の悲惨な「心中」事件が起こらないようにしようというメッセージも含まれていました。これは、支援者たちの胸に響き、大きな訴えにもなったと思っております。そしてそれがさらに全国にも広がっていったように思います。

京都府の男性介護者のパンフレットに出ていますように、これからは「働きながら介護をする」時代、介護をしていても仕事を辞めないで、介護と仕事が両立できることが求められる時代になってきました。これは、荒川会長をはじめ全国の皆さま方の力ではないかと思いますが、大きな変化が生まれてきまし

た。

話を戻しますと、荒川区では、さきほどの「銀の杖」は、1991年にでき、少しずつ家族介護者が集まりを持つようになってきました。このなかに男性の介護者も入っていたのです。入っていたけれども、会場の後ろでそっと、何も言わないで座っていたのです。荒川会長も、今はお話しされますけれども、当時はそっと座っていました。そうしたこともあって、荒川会長が、男性は男性で問題があって、しゃべられる「場」をつくろうではないかということを考えて「オヤジの会」をつくられたわけです。

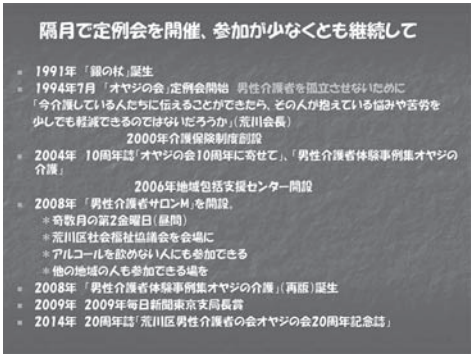
荒川区は東京の下町です。町工場のまちです。そこに、戦前、全国から集まって働いていた人たちが住んできたまちです。かつては子どもも多かったところです。今は高齢化率が高い、都内では高齢化した区の一つです。

1980年代は、サービスがないために要介護の高齢者だけが外出できなかったのではなく、女性の介護者も男性の介護者も、介護のために、長時間、家から出ることはとても困難でした。出られるのですが、2時間以上の外出はできなかったのです。介護者が1泊の旅行をするというのは、ほんとうに夢のようなことだったのです。1980年代後半になり、ショートステイが冠婚葬祭以外に、介護疲れのためにいろいろ利用できるようになりますが、まだまだ介護者が自由に出歩けるような状態ではありませんでした。

1980年代の前半のことですが、なんとか1年に1度は高齢者の外出の機会を作ろうということが、保健師さん等からも声が出てきていました。そこで、荒川区で在宅の難病の人や要介護の高齢者を対象に、ボランティアの協力もあって、外出の機会をつくるために「お花見会」の集まりがもたれるようになりました。何度かこの集まりを持つ中で、その時を利用して、少しの時間でもよいので、家族介護者の集まる場もつくっていこうということになりました。

このようにして介護者だけの集まりが生まれ、介護者同士の交流の場が荒川区内で少しずつできてきたわけです。介護者だけで集まって交流をする場を持ったことがきっかけで、4～5年後目くらいには、認知症の人の介護者の会の「銀の杖」ができました。それが荒川区の場合ですが、「オヤジの会」ができる大きな力になったわけです。ですから、荒川区の場合、集まりの場をつくるというのは、とても大事だったと思います。

4. 継続した力

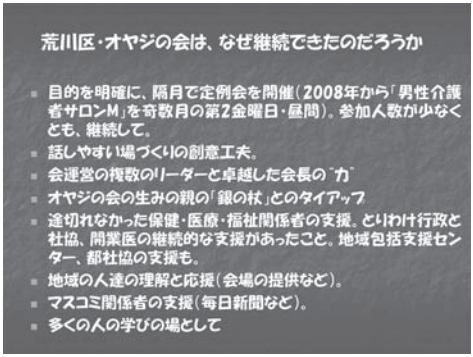


次に、なぜこのように、途中で途切れることもなく、「オヤジの会」が続いてきたのかということをお話ししたいと思います。参加者が少なくても継続してきたことが大事だったと思います。このことを「オヤジの会」の中心メンバーが大事にしっかりと守ってきたわけです。これは、とても努力が要ることだったと思います。途中で、いろいろ制度も変わってきましたが、「オヤジの会」としては、ずっと広まっていったわけです。

2004年には10周年の集まりがもたれました。この10年間はいろいろな方々の支援もあり、迎えることができました。2008年には「男性介護者のサロンMの会」という会が立ち上がっています。

これは、お酒がないと話ができないといっても、中には、お酒が嫌いな人もいるわけです。そういう人たちのために場をつくろうという提案が出てきました。そのために、鈴木訪子課長さんや、内山副代表さんらの社協の職員、荒川区社協の協力で、社協の中に会場をつくってくれました。そして、この「Mの会」は、荒川区以外の方々にも開放して、荒川の「オヤジの会」の経験を学ぶ場になっていきました。この同じ年に、全国のネットが出来たわけです。2009年には、毎日新聞の賞を頂いて、これが随分励ましにもなりました。2014年には、20周年を迎えました。

5. 6つの力



これ以外に、「オヤジの会」が継続した力を考えてみますと、6つのことがあるように思います。第一は、会の運営を複数のリーダーで担うように努力されてきたことではないかと思います。会長の卓越したリーダーシップと同時に、複数のリーダーという力があったように思います。第二は、「銀の杖」は、「オヤジの会」の生みの母というだけではなく、その後も「銀の杖」と「オヤジの会」のタイアップした取り組みがあったことだと思います。お互いが励まし合い、支え合ってきたこともとても大きいのではないかと思います。第三は、地域の人達の応援があったことではないかと思います。会場を貸してくれた居酒屋経営者、喫茶店経営者、施設関係者等のさまざまな理解が広がっていきました。第四には、荒川区社会福祉協議会が、「オヤジの会」の設立の時から、多面的な支援を続けてくれたことも大きかったと思います。第五には、区内の専門職の人達の継続的な協力も大きかったように思います。区内の訪問看護師、ホームヘルパー、ケアマネジャー、地域包括支援センター職員が会の活動にいろいろな形で参加し、集まりにもでてきてくれて悩みごとの相談から、運営の支援までいろいろ関わってくれたことです。しかも、途切れることなく継続的に関わってくれたことがとても大きなことではなかったかと思います。第六は、荒川区も行政として、いろいろな支援をしてくれたことが大きいと思います。高齢者福祉、障害者福祉、保健所等からのいろいろな形の支援がありました。

6. 男性介護者とその支援者に向けて

荒川区の「オヤジの会」の誕生と歩み、その継続の力について、私が学んできたことをお話ししてきましたが、全国の男性介護者とその支援者に、次の時代に向け、「かたろう！男の介護」、「つたえよう！私の介護体験」、「ひろめよう！

介護の仲間と集い」、「かえよう！介護保険と介護休暇」、「なくそう！介護退職と介護事件」と申し上げたいと思います。

資料

(1)「20 年のあゆみ」

(2) 長島明子「オヤジたちへの賛歌」

＜資料（1）＞

２０　年　の　あ　ゆ　み

１９９４年　平成６年度

月　日	会　名	会　場	内　容
平成６年 6.21（火）	設立打合せの集まり	区役所地下一階 さくら食堂	男性介護者の会設立打合せ初会合 メンバー４人、スタッフ３人
7.16(土)	定例会	圓　太	会の名称決定 「オヤジの会―男性介護者の会」会の規約決め
9.17 土)	定例会	圓　太	会の世話人決定／会則作り　会長　荒川　不二夫 副会長　寺村　高雄 副会長　鏑木　義行
11.19(土)	定例会	圓　太	◎学習会　訪問看護の制度について 佐藤　係長 ☆懇親会　総会４月に行なう
平成７年 2.18（土）	定例会	圓　太	◎学習会　福祉の制度について　向田　係長 ☆懇親会　総会について

１９９５年　平成７年度

月　日	会　名	会　場	内　容
4.14(金)	第１回総会	荒川保健所 大会議室	◎総会　平成６年度の活動と会計報告 平成７年度の活動と予算等　☆懇親会
6.17(金)	見学会	荒川通所サービスセンター見学	◎案内説明 内山　所長
8.19(土)	定例会	高齢者センター	◎学習会「オヤジの会に入会したわけ」 医療短大　奥山則子　先生　☆懇親会
平成７年 10.21(土)	定例会	高齢者センター	◎学習会「今からの在宅医療」 小島医院　院長　小島　靖　先生　☆懇親会
12.16(土)	定例会	高齢者センター	◎学習会「老人保険制度とのつきあいかたについて」 佐藤　係長　☆懇親会
平成８年 2.17(土)	定例会	高齢者センター	ラジオ放送のテープを聞き 今後の活動について話し合い
イベントへ参加			
7.10.26 (木)	福祉公社設立３周年記念		荒川会長出席「オヤジの会」の話を行う
7.10.29 (日)	難病シンポジウム		寺村副会長「オヤジの会入会のおさそい」配布
8.2.17(土)	尾久相談所地域懇談会		鮫島会員　オヤジの会紹介

１９９６年　平成８年度

月　日	会　名	会　場	内　容
平成８年 4.20(土)	第２回総会	荒川保健所講堂	◎総会　平成７年度活動報告、会計報告 平成８年度活動方針、会計予算　☆懇親会
6.15(土)	定例会	高齢者センター	◎学習会「たんぽぽ計画について」 講師　社会福祉協議会　小野氏 ☆懇親会　日本テレビ取材参加あり
8.31(土)	講演会	サンパール荒川 小ホール	演題「２１世紀にむけての在宅介護」 講師　太田　貞司　先生　☆懇親会
10.19(土)	定例会	アクト２１	◎学習会「老後の住環境と介護」　講師　荒川会長 ☆懇親会
12.14(土)	定例会	アクト２１	経験交流　☆懇親会
平成９年 2.15(土)	定例会	アクト２１	◎学習会「レンズを通してみた生命の輝」
イベントへ参加			
8.11.21	研修講座	アクト２１	男女平等問題研修講座　講師　会長　荒川　不二夫
8.11.30,12 .7	研修講座	福祉公社	男性の為の介護講座　参加　荒川氏、寺村氏、鏑木氏、
9.11.30,2. 28	研修講座	尾久相談所	「看護教室」出席　石田氏、　荒川氏

１９９７年　平成９年度

月　日	会　名	会　場	内　容
4.25(金)	第３回総会	アクト２１	◎総会　平成８年度活動報告、決算報告 平成９年度活動方針、予算 ◎講演会　「介護者の心の健康」　講師　小島　靖先生
9.25(木)	料理教室	保健所栄養室	「食事作りの基礎の基礎」 講師　栄養士　新村　真由美氏　　石毛　　貴子　氏
12.13(土)	定例会	アリエス たちばな	◎学習会　「一生自分の歯で食べるために」 講師　歯科衛生士　山田　宏美　氏　　☆懇親会
平成１０年 3.14（土）	定例会	アクト２１	◎学習会　「健康について」　講師　本保　予防課長 ☆懇親会
イベントへ参加			
h9.9.26	講演会	豊島区立男女平等推進センター	荒川会長　「オヤジの会」について講演 （住宅改造を兼ねて）

１９９８年　平成１０年度

月　日	会　名	会　場	内　容
平成１０年 4.20	第４回総会	荒川保健所 大会議室	◎総会　平成10年度活動報告、決算報告 平成11年度活動方針、予算
6.19	定例会	アクト２１	◎学習会　「介護保険制度について」 講師　介護保険準備担当　高梨課長　　☆懇親会
9.19	定例会	アクト２１	会員の交流と介護相談
10.24	定例会	アクト２１	◎学習会　「男性介護現在・過去・未来」 講師　長島　明子氏　　☆懇親会
12.13	銀の杖と 合同交流会	保健所講堂	交流会　男性介護者の会紹介、他区の方と交流
12.19	忘年会	荒川寿亭群	交流会　支援会員多数参加
2.20	定例会	アクト２１	◎講演会「男性が女性を介護するとき」 講師　都立保健科学大学　奥山　則子助教授

１９９９年　平成１１年度

月　日	会　名	会　場	内　容
4.22（木）	第５回総会	荒川保健所 大会議室	◎平成１１年度活動報告、会計報告 平成１２年度活動方針、予算案　　☆懇親会
6.19（土）	定例会	アクト２１	◎学習会「相談の窓口に見えるもの」 講師　尾久介護センター　八田　桂二　氏　☆懇親会
9.18（土）	定例会	アクト２１	◎学習会　介護保険制度に向けての学習会　☆懇親会
10.16（土）	銀の杖等と 合同交流会	生涯学習 センター	◎学習会「介護保険制度について」 講師　介護保険準備担当　高梨　課長
12.13（土）	定例会	アクト２１	◎学習会「介護保険と上手に付き合う」 講師　ケアマネジャー　長島　明子　氏　　☆懇親会
平成１２年 2.19（土）	定例会	アクト２１	◎講演会「私達の生活について」 講師　都立保健科学大学助教授　奥山　則子氏 ☆懇親会

２０００年　平成１２年度

月　日	会　名	会　場	内　　容
4.15（土）	第6回総会	アクト２１	◎総会　平成１１年度活動報告、決算報告 平成１２年度活動方針、予算案　☆懇親会
6.17（土）	定例会	アクト２１	◎学習会「インターネットって何」 講師　北川　孝幸　氏　☆懇親会
9.16（土）	定例会	アクト２１	オヤジの会ホームページ開設についての勉強会 支援講師　松村　登　氏　☆懇親会
10.21（土）	定例会	アクト２１	◎学習会「介護者の健康管理『運動と休養の進め』」 講師　荒川保健所保健サービス課課長　宮本眞理子氏 ☆懇親会
12.16（土）	定例会	アクト２１	◎学習会「オヤジの会、会員調査結果報告」 講師　都立保健科学大学助教授　奥山則子氏 ☆懇親会
平成13年 2.17（土）	定例会	アクト２１	◎学習会「介護保険その後、利用状況調査結果より」 講師　荒川区高齢者保健福祉課　高梨　博和　氏
イベントへ参加			
10.14（土）	第２回 介護フェア	町屋文化 センター	◎第２回介護フェア　「オヤジの会」入会案内配布 活動紹介で加藤嘉昭氏が介護されている状況を話された
10.21（土）	調査	会員宅	「オヤジの会」会員の介護状況調査を会員宅訪問して行う 12月の定例会でまとめの説明　担当　奥山　則子　先生

２００１年　平成１３年度

月　日	会　名	会　場	内　容
4.20（金）	第7回総会	アクト２１	◎総会　平成１２年度活動報告、決算報告 平成１３年度活動方針、予算案　☆懇談会
6.16（土）	定例会	アクト２１	◎学習会「痴呆との接し方について」 講師　林診療所　所長　林　伸治　先生　☆懇談会
9.13（木）	定例会	アクト２１	◎学習会「荒川区での保険事業の現況」 講師　高齢者保健福祉課課長　高梨博和氏　☆懇談会
10.20（土）	定例会	アクト２１	◎学習会「健康管理について」 講師　小島医院院長　小島　靖　先生　☆懇談会
11.24（土）	定例会	アクト２１	◎学習会「男性が介護することについて」 講師　東京慈恵医科大学医学部看護学科 教授　奥山　則子　氏　☆懇談会
12.15（土）	定例会	アクロスあらかわ アクト２１	◎学習会「介護マラソンの上手な走り方」 講師　カウンセラー　羽成　幸子　氏　☆懇談会
平成14年 2.16（土）	定例会	アクト２１	◎学習会「人生を大切に」 講師　東京慈恵医科大学医学部看護学科 教授　奥山　則子　氏　☆懇談会
イベント参加			
13.9.29 ,30	フェスティバル	アクト２１	◎アクト２１フェスティバル オヤジの会ポスター掲示
13.10.6	講演会	町屋在宅高齢者通所サービス　センター	◎講演会「介護の心がけ」 講師　会長　荒川　不二夫　氏
	福祉まつり 介護フェア	荒川総合スポーツセンター	◎第16回あらかわ福祉まつり・あらかわ介護フェア2001 オヤジの会紹介コーナと会員募集
13.12.15	講演会・主催 銀の杖 オヤジの会	アクロス あらかわ	◎講演会「介護マラソンの上手な話し方」 講師　羽成　幸子　氏

２００２年度　平成１４年度

月　日	会　名	会　場	内　　容
4.19（金）	第8回総会	アクト２１	◎総会　平成１３年度活動報告、決算報告 平成１４年度活動方針、予算案　☆懇談会
6.15（土）	定例会	老人福祉センター	◎学習会「臭いで困っていませんか」 講師　はやし診療所院長　林　伸治先生　☆懇談会
7.30（火）	施設見学	花の木ハイム荒川	介護老人福祉施設　案内　施設長　池田　氏
8.30（金）	料理教室	荒川保健所調理室	調理実習 講師　荒川保健所　栄養士　新村　真由美　氏
9.21（土）	定例会	老人福祉センター	◎学習会「お年寄りの罹りやすい病気」 講師　尾久クリニック白昌善　先生　☆懇談会
10.19（土）	定例会	花の木ハイム荒川	◎学習会「医療の歴史とピン・シャン・コロリ（ＰＳＫ）の達成について」 講師　宮ノ前診療所所長　土屋悟史先生　☆懇談会
12.9（木）	定例会	花の木ハイム荒川	◎学習会「第二期荒川区高齢者プラン（中間のまとめ）」 講師　荒川区介護保険課課長　皆川誠氏　☆懇談会
平成15年 2.15（土）	定例会	花の木ハイム荒川	◎学習会「成年後見制度」　☆懇談会 講師　荒川区社会福祉協議会係長　鈴木訪子氏
イベント参加			
平成14年 7.22（月）	集い	ラングウッド	主催　荒川区社会福祉協議会　荒川区介護者の集い 「オヤジの会」４名出席
9.22（日）	アクト21 フェストバル	アクト２１	「オヤジの会」紹介用ポスター掲示
平成14年 11.9（土）	介護フェア	総合スポーツセンター	第４回介護フェア・第１７回あらかわ福祉まつり 「オヤジの会」紹介コーナ会員募集

２００３年度　平成１５年度

月　日	会　名	会　場	内　　容
4.18（金）	第9回総会	花の木ハイム荒川	◎Ｈ１４年度活動報告・会計報告 Ｈ１５年度活動方針・予算　☆懇親会
5.17（土）	定例会	花の木ハイム荒川	◎学習会「ケアプラン作成とケアマネジャーと上手な接し方」 講師　ケアマネット荒川　山崎　氏　☆懇親会
6.21（土）	定例会	花の木ハイム荒川	◎学習会『健康の話について』 講師　はやし診療所　林　伸治　先生　☆懇親会
7.19（土）	定例会	花の木ハイム荒川	◎学習会「積極的養生法」 講師　宮ノ前診療所所長　土屋悟史先生　☆懇親会
9.20、21	旅行	ホテルグリーンパール那須	◎一泊バス旅行　参加者１２名 （ゆったりバスの旅）
9.27（土）	定例会	花の木ハイム荒川	◎学習会「高齢者のための保健と福祉サービスのご案内」 講師　荒川区高齢者保健福祉課課長　池田　洋子　氏 ☆懇親会
11.15（土）	定例会	花の木ハイム荒川	◎学習会「バリアフリー住宅」　講師　荒川不二夫会長 ☆懇親会　１０周年記念誌発行の件
12.19（金）	料理教室	荒川保健所調理室	◎実習「肉じゃが」他　講師　栄養士　新村　真由美　氏
平成16年 1.17（土）	定例会	花の木ハイム荒川	◎学習会「他地域の男性介護者の状況」 講師　東京慈恵医科大学医学部看護学科 教授　奥山　則子　氏　☆懇親会
2.21（土）	定例会	花の木ハイム荒川	◎学習会「前立腺手術の体験発表」 講師　荒川　不二夫　会長　☆懇親会
イベント参加			
平成15年 5.9（金）	銀の杖総会	アクロスあらかわ	荒川会長、相川副会長出席
8.29（金）	講演会	町屋文化センター	自分らしく生きられるグループホーム 主催　介護サービスを良くする会・荒川協力オヤジの会
11.15（土）	講演会	総合スポーツセンター	第１８回あらかわ福祉まつり第５回あらかわ介護フェア

平成 21 年度

月　日	会　名	会　場	内　容
4 月 17 日（金）	第 15 回総会	荒川山吹 ふれあい館	平成 20 年度活動報告･会計報告、平成 21 年度活動方針・予算案、交流会
5 月　8 日（金）	男性介護者 サロン M	社会福祉協議会	ふれあい粋・活き（いきいき）サロン
6 月 20 日（土）	第 1 回定例会	花の木ハイム荒川	学習会「NHK テレビで放映された今年度総会の反響について」講師 荒川会長、交流会
7 月 10 日（金）	男性介護者 サロン M	社会福祉協議会	ふれあい粋・活き（いきいき）サロン
8 月 22 日（土）	第 2 回定例会	荒川山吹 ふれあい館	学習会「AED（自動体外式除細動器）の操作講習」講師 荒川消防署の署員さん、交流会
11 月　7 日（土）	男性介護者の つどい in あらかわ	首都大学東京 荒川キャンパス	立命館大学 津止正敏さんの講演、甲斐京子さんのミニコンサート、交流会
12 月 19 日（土）	第 3 回定例会 忘年会	カフェ・ワイズ	学習会「男性介護者と支援者の全国ネットワーク」発足の報告講師 荒川会長（ネットワーク代表）、交流会
平成 22 年 1 月　8 日（木）	男性介護者 サロン M	社会福祉協議会	ふれあい粋・活き（いきいき）サロン
1 月 20 日（水）	第 5 回定例会	荒川山吹 ふれあい館	交流会 新年の集い
2 月 20 日（土）	第 6 回定例会	尾久橋町会会館 「プラザ尾久橋」	学習会「男性介護者と支援者の全国ネットワーク発足後の反響について」講師 荒川会長（ネットワーク代表）、交流会

平成 22 年度

月　日	会　名	会　場	内　容
平成 22 年 4 月 16 日（金）	第 16 回総会	荒川山吹 ふれあい館	平成 21 年活動報告・会計報告 平成 22 年活動方針・予算案 交流会
5 月 14 日（金）	男性介護者 サロン M	社会福祉協議会	ふれあい粋・活き（いきいき） サロン
6 月 25 日（金）	第 1 回定例会	カフェ・ワイズ	交流会
7 月　9 日（金）	男性介護者 サロン M	社会福祉協議会	ふれあい粋・活き（いきいき） サロン
8 月 20 日（金）	第 2 回定例会	荒川山吹 ふれあい館	交流会
9 月 10 日（金）	男性介護者 サロン M	社会福祉協議会	ふれあい粋・活き（いきいき） サロン
10 月 16 日（土）	第 3 回定例会	カフェ・ワイズ	学習会「介護保険の使い方と現状」 ケアマネット：介護支援専門員の会 交流会
11 月 12 日（金）	男性介護者 サロン M	社会福祉協議会	ふれあい粋・活き（いきいき） サロン
12 月 16 日（木）	第 4 回定例会	荒川山吹 ふれあい館	交流会
平成 23 年 1 月 14 日（金）	男性介護者 サロン M	社会福祉協議会	ふれあい粋・活き（いきいき） サロン
2 月 19 日（土）	第 5 回定例会	アクロス荒川	学習会「成年後見制度」 社協：石塚氏 交流会

平成 23 年度

月　日	会　名	会　場	内　容
平成 23 年 4 月 22 日（金）	第 17 回総会	ぷらざ尾久橋 (尾久橋町会会館)	平成 22 年活動報告・会計報告 平成 23 年活動方針・予算案 交流　高齢者福祉課係長出席
5 月 13 日（金）	男性介護者 サロン M	社会福祉協議会	ふれあい粋・活き（いきいき） サロン 社協　丸尾さん⇒小野さんに
6 月 18 日（土）	第 1 回定例会	荒川山吹 ふれあい館	ケアマネット荒川 介護支援専門員のアドバイス 交流会
7 月　8 日（金）	男性介護者 サロン M	社会福祉協議会	ふれあい粋・活き（いきいき） サロン
8 月 20 日（土）	第 2 回定例会	荒川山吹 ふれあい館	暑気払い 福祉祭りの概要説明 交流会
9 月　9 日（金）	男性介護者 サロン M	社会福祉協議会	ふれあい粋・活き（いきいき） サロン
10 月 22 日（土）	第 3 回定例会	荒川山吹 ふれあい館	学習会「介護者･要介護者の入退院」 小台佐藤病院 MSW 若月さん 交流会
11 月 11 日（金）	男性介護者 サロン M	社会福祉協議会	ふれあい粋・活き（いきいき） サロン
12 月 10 日（土）	第 4 回定例会	荒川山吹 ふれあい館	伊藤さん取材 DVD 視聴 忘年会 交流会
平成 24 年 1 月 13 日（金）	男性介護者 サロン M	社会福祉協議会	ふれあい粋・活き（いきいき） サロン
2 月 25 日（土）	第 5 回定例会	荒川山吹 ふれあい館	伊藤さん取材 DVD 視聴 オヤジの会 HP 紹介 交流会
3 月　9 日（金）	男性介護者 サロン M	社会福祉協議会	ふれあい粋・活き（いきいき） サロン

平成 24 年度

月　日	会　名	会　場	内　容
平成 24 年 4 月 20 日（金）	第 18 回総会	荒川山吹 ふれあい館	平成 23 年活動報告・会計報告 平成 24 年活動方針・予算案 交流会
5 月 11 日（金）	男性介護者 サロン M	社会福祉協議会	ふれあい粋・活き（いきいき） サロン 社協　丸尾さん⇒小野さんに
6 月 16 日（土）	第 1 回定例会	荒川山吹 ふれあい館	ケアマネット荒川 介護支援専門員のアドバイス 交流会
7 月 13 日（金）	男性介護者 サロン M	社会福祉協議会	ふれあい粋・活き（いきいき） サロン
8 月 18 日（土）	第 2 回定例会	荒川山吹 ふれあい館	介護保険課長木村氏 新しくなった介護保険制度 交流会
9 月 14 日（金）	男性介護者 サロン M	社会福祉協議会	ふれあい粋・活き（いきいき） サロン
10 月 20 日（土）	第 3 回定例会	荒川山吹 ふれあい館	荒川包括・松村・飯塚 認知症サポーター養成講座 交流会
11 月　9 日（金）	男性介護者 サロン M	社会福祉協議会	ふれあい粋・活き（いきいき） サロン
12 月 15 日（土）	第 4 回定例会	荒川山吹 ふれあい館	高齢者福祉課係長　今泉氏 インフルエンザの予防 交流会
平成 25 年 1 月 11 日（金）	男性介護者 サロン M	社会福祉協議会	ふれあい粋・活き（いきいき） サロン
2 月 16 日（土）	第 5 回定例会	荒川山吹 ふれあい館	高齢者福祉課　医療相談員 中谷氏　介護施設の選び方 交流会
3 月　8 日（金）	男性介護者 サロン M	社会福祉協議会	ふれあい粋・活き（いきいき） サロン

平成 25 年度

月　日	会　名	会　場	内　容
平成 25 年 4 月 20 日（土）	第 19 回総会	荒川山吹 ふれあい館	平成 23 年活動報告・会計報告 平成 24 年活動方針・予算案 交流会
5 月 10 日（金）	男性介護者 サロン M	社会福祉協議会	ふれあい粋・活き（いきいき） サロン
6 月 15 日（土）	第 1 回定例会	荒川山吹 ふれあい館	ケアマネット荒川 介護支援専門員のアドバイス 交流会
7 月 12 日（金）	男性介護者 サロン M	社会福祉協議会	ふれあい粋・活き（いきいき） サロン
8 月 17 日（土）	第 2 回定例会	荒川山吹 ふれあい館	管理栄養士　崎川氏 「介護食について」 交流会
9 月 13 日（金）	男性介護者 サロン M	社会福祉協議会	ふれあい粋・活き（いきいき） サロン
10 月 19 日（土）	第 3 回定例会	荒川山吹 ふれあい館	歯科医師　金井氏 「口腔ケアの重要性」 交流会
11 月　8 日（金）	男性介護者 サロン M	社会福祉協議会	ふれあい粋・活き（いきいき） サロン
12 月 14 日（土）	第 4 回定例会	荒川山吹 ふれあい館	理学療法士　宮下氏 「膝痛の予防」 交流会
平成 26 年 1 月 10 日（金）	男性介護者 サロン M	社会福祉協議会	ふれあい粋・活き（いきいき） サロン
2 月 16 日（日）	第 5 回定例会	荒川山吹 ふれあい館	荒川消防署・医療福祉研究所 「介護世帯における防災対策」 交流会
3 月 14 日（金）	男性介護者 サロン M	社会福祉協議会	ふれあい粋・活き（いきいき） サロン

平成 26 年度

月　日	会　名	会　場	内　容
平成 26 年 5 月　3 日（土）	20 周年記念行事	サンパール荒川 小ホール	式典 パネルディスカッション 記念パーティ
5 月　9 日（金）	男性介護者 サロン M	社会福祉協議会	ふれあい粋・活き（いきいき） サロン
6 月 20 日（金）	第 19 回総会	荒川山吹 ふれあい館	平成 25 年活動報告・会計報告 平成 26 年活動方針・予算案 交流会
7 月 11 日（金）	男性介護者 サロン M	社会福祉協議会	ふれあい粋・活き（いきいき） サロン
8 月 23 日（土）	第 2 回定例会	荒川山吹 ふれあい館	高齢者福祉課　今泉係長 「認知症予防と荒川区の現状」 交流会
9 月 12 日（金）	男性介護者 サロン M	社会福祉協議会	ふれあい粋・活き（いきいき） サロン
10 月 18 日（土）	第 3 回定例会	荒川山吹 ふれあい館	区内地域支援包括センター 「包括支援センターの取り組み」 交流会
11 月　7 日（金）	男性介護者 サロン M	社会福祉協議会	ふれあい粋・活き（いきいき） サロン
12 月 20 日（土）	第 4 回定例会	社会福祉協議会	ケアマネット荒川 介護支援専門員のアドバイス 交流会
平成 26 年 1 月　9 日（金）	男性介護者 サロン M	社会福祉協議会	ふれあい粋・活き（いきいき） サロン
2 月 21 日（日）	第 5 回定例会	社会福祉協議会	かどころの家　小山氏・小林氏 「小規模多機能型事業所の活用」 交流会

＜資料（2）＞

基調講演参考資料（医学書院「訪問看護と介護」1999 年 Vol.4 No.2 より）

オヤジたちへの讃歌

長島　明子

荒川区社会福祉協議会ソーシャルワーカー

「荒川区男性介護者の会」（通称オヤジの会）は、平成 6 年 6 月に荒川区役所食堂にて 4 人のオヤジ達が顔を合わせ、ささやかに誕生した。4 人は初対面であったが、何か心に通じ合うものを感じ合った。今、5 年目を迎え、メンバーも増え、社会的にもこの会は注目されているという手応えを感じている。介護問題がクローズアップされることが多い昨今、「男性による介護」の割合も増加してきている。「オヤジの会」誕生までのことや敬愛してやまないオヤジ達のことをまとめてみようと思う。

訪問看護指導と MSW

平成 2 年 4 月に、私は荒川保健所の非常勤医療ソーシャルワーカー（MSW）として着任した。荒川保健所には、訪問看護指導事業のチームスタッフとして MSW が配置されており、在宅療養をしている寝たきりや痴呆性の高齢者・難病患者やその家族への訪問相談業務を行なっていた。在宅介護支援センターができる遙か以前に在宅ケアをフィールドにソーシャルワーカーが活動していたことは本当に画期的なことである。前任者である太田貞司さん（現在は県立広島女子大助教授）が、2 代目の私に申し送った仕事はたった 1 つ。「介護事件（介護心中など）を起こさせないこと」。介護困難は男性介護者に多く、特に息子が介護者の場合はさらに困難度は高いという太田さんの言葉が、このオヤジの会発足への原動力になったと思っている。

荒川のオヤジ達との出会い

MSW は、訪問看護指導事業の対象者すべてについてほぼ把握していた。男

性の介護者は全体の１～２割であり、統柄としてはやはり夫が占めていた。荒川は東京の下町で職人の町。多くの場合が職住一体の生活をしている。下町に男性の介護者が多いという客観的データーを確認したことはないが、「職住一体」こそ、自宅で男性が介護と仕事を両立させることができる重要な要素ではないかと今でも私は思っている。

そんな下町のオヤジ達と私は訪問相談業務を通じて出会っていったが、男性介護者の家族会の必要性について痛感したのは年に数回の家族会の場面であった。当時、年に１～２回、訪問看護指導事業の一大イベントとして「げんきかい」という事業があった。普段外出の機会のない、訪問看護の対象者を外に連れ出すという屋外療養事業である。このときに並行して「家族会」を開催しており、多くの女性介護者の中で、私は男性介護者の家族会での共通の特徴を見つけたのだ。

【特徴】

①男性が介護をしているというだけで、周囲の女性介護者から賞賛の言葉が送られる。先に誉められてしまうので、弱音や本音など言えない状況になってしまう。

②女性介護者に囲まれて女々しいことは言えないのでついつい格好の良いところ、立派に介護していることを誇張してしまう傾向がある。

③多くは、女性介護者の多弁に圧倒され、頷くだけの聞き役を担ってしまい、いくらも発言しないうちに閉会となってしまう。

個別に家庭訪問をしているときは、多弁に語る彼ら。ケースワークからグループワークへ…男性介護者のグループ化は私のソーシャルワーカーとしての大きな目標となった。

オヤジ達の介護と本音

すべての男性介護者をあてはめることはできないが、長期に自宅で介護をしている男性介護者の多くは、「頑固で一途」という表現があてはまるのではないか。それは、彼らの介護生活の工夫にもしばしば見られる。驚くことに、彼らはその介護体験から実に様々な手作り福祉機器を作っている。手すりやスロープはもちろん、妻が寝ながら電話を使えるような工夫や車椅子にはめ込む

テーブル・滑車を使った移動リフト・階段昇降機まで手作りをしている人もいた。

一見、介護を生き甲斐にし、楽しんでいるような部分を見せながらも、多くのオヤジ達が口を揃えて言う。「本当は俺が介護してもらうはずだったのに。まさか自分が介護者になるとは思ってもみなかった。妻の介護をする夫など世界中で自分くらいなものだ」。そして同時にこんな言策も聞かれる。「女房の一人くらい面倒みれないようじゃ、男といえない。自分の手で介護するのが妻への愛だ」。いずれもオヤジの本音と思う。夫としての責任と予想もしていなかった介護生活、不慣れな家事や炊事、妻への様々な思いとこれから先々の不安。そして周囲から聞こえるさまざまな雑音も彼らにはプレッシャーとなるのである。

難病の妻の介護をしていたAさん。以前は町会の役員の常連でもあったが、妻の介護を機に地域活動やつきあいも減っていった。最初のころは出入りしていた近隣の人々も、療養生活が長引くと足は遠のくものだ。

ある日、私が訪問をすると、間もなく向かいの家のおじいちゃんがAさん宅を訪れた。別段用事はなさそうだが、Aさんが私を紹介すると、その人はすぐに帰って行った。Aさんは苦笑いをして言った。「見慣れない若い女性が訪ねて来たから偵察に来たんでしょう。寝たきりの女房でも生きているうちは、周囲の目がうるさいんだよ」。ともすれば、自分の訪問も近所のあらぬ噂になりかねないことを知った。

Sさんは当時18年近く寝たきりの妻の介護をしていた。そのころ、ショートステイがだいぶ介護者の中にも広まり始め、私はSさんにもその利用を勧めていた。長年の介護生活は非常に刺激がない単調な暮らしとなっていたし、ミニ旅行でもすればリフレッシュできると考えたからである。すでにSさん自身も高齢であり、妻を看取ったあとに旅行といっても、その時Sさんが旅行に行ける保障はない。Sさんの気持ちは複雑だ。旅行は行きたいが、妻を知らない施設に預けるのは不安なのだ。結局、長い時間をかけて少しずつ決意が固まり、Sさんはこれまで介護には参加してこなかった息子に妻を頼み、旅行へ行くことを決意した。Sさんが旅行から戻ると、私は早速訪問をした。どんな感想が聞けるか楽しみだった。しかし旅行の土産話よりも、私が忘れること

のできない言葉がある。Sさんがしみじみ言ったのだ。「でもね長島さん、1人で旅行に行ってもつまらないもんだね」。旅行に行けば、気分転換ができると決めつけていた自分の愚かさに気がついた。

介護が長期化すると、地域や親戚からも孤立してしまう。周囲の人に自分の悩みを話しても、介護経験のない人にはなかなか理解してもらえず、逆にお説教されることもある。励ましのつもりの周囲の言葉は、慰めにならないことが多い。ついつい1人でいろいろな気持ちを紛らわすためのアルコールが増えるのも男性介護者の特徴である。

男同士の楽しい酒を取り戻そう！

初めは区役所の食堂で始まったオヤジの会。女性は何もなくてもおしゃべりできるが、男性が仲良くなる最大の秘訣は“楽しい酒”と相場は決まっている。男同士、気楽に介護を語り、悩みを分かち合い、互いに労う会。決して明るいことばかりでない介護生活の明日へのパワーへつながるような楽しい酒を飲もう！それだけでも十分存在価値があるのではないか。私はそう思った。保健所近くにある小さな飲み屋の座敷を借りて、本当に楽しく和やかにオヤジ達の介護宴会（?）は続いた。様々な経済事情もあるため、年会費も定例会の参加費も極力低額にした。飲み屋のオヤジさんもおかみさんも事情を理解し、惜しみなく協力してくれた。妻や母を自宅に残して来ているため、時間もそう長くはとれない。難しい話は抜きにして、とにかく飲んで、しゃべってまた会うのを楽しみにしながら家路につくオヤジ達の後ろ姿は、ささやかな至福の時を過ごした普通の酔っぱらいのオヤジだった。

オヤジの会でオヤジ達は、これまでの様々な介護の失敗談や悩みを打ち明け合った。家事の基本やコッを知らずに困惑したこと。とにかく介護は体力勝負と毎日、肉料理を食べていたら、自分も妻も高尿酸血症になってしまったこと。福祉のサービスを使いたいが、その手続きが面倒だったり相談窓口の敷居が高いこと。妻の下着を買いに行くのが何より恥ずかしくて苦痛だったこと。介護に割かれる時間が増えて、仕事を減らさなければならなかったこと。介護のイライラからつい妻に辛くあたったり、手を出したこと。そして、そんな自分を責めたこと。オヤジの会の素晴らしい所は、決して互いの介護について批評し

ない所だと思っている。ありのままの自分を受入れてくれるからこそ、本音が言えて心の疲れを癒すことのできる場になることをオヤジ達は暗黙のうちに了解しているのである。

オヤジの会は、現在家族を介護している男性、もしくは介護経験のある男性であれば、年齢を問わず入会できる。また、訪問看護婦やソーシャルワーカー・保健婦など、会の主旨に賛同し、会員の活動をサポートする専門職が支援会員として関わっている。会を重ねるうちに、会員も増え、飲み屋の座敷が手狭になった。絶好の会場から離れるのは辛かったが、定例会はただの宴会から学習会を盛り込んだものに発展した。他にも講演会を主催したり、保健所の介護関係の事業に参加協力したり、その活動は荒川区内外を問わずどんどん広がってる。

オヤジ達の心をつかむ秘訣

オヤジ達の本音を聞き出し、その心をつかむのはなかなか難しい。荒川でこのオヤジの会が出来たのは、何よりMSWの存在があったからと思わずにはいられない。MSWは、目に見える具体的なサービス提供者でもなく、サービスの決定権すら持たない存在であり、初めは何をするために訪問してくるのか理解できない介護者も多い。具体的なサービス提供をしないことを、最初は辛く思ったが、それが結局、最大の武器となった。来ても来なくても、介護生活に直接影響しないMSWは、サービスの愚痴も不満も改善してほしいことも何でも話してよい気楽な相手なのだ。滞在時間や訪問回数に制限がなく、必要に応じた関わりも可能だ。女性介護者よりも心を開いてくれるまで時間がかかる男性介護者には、とにかくじっくり関わった。こだわることには徹底的にこだわる彼らにとって、もっと楽に介護を…という助言が場合によっては無意味なことも学んだ。徹底的な彼らには徹底的につきあい、その考え方や生き方そして独自の介護論を受け入れてこそ、彼らのハートを掴むことができるのではないか？これが「長島流オヤジとの関係作りの法則」である。そしてあちこちに点在するオヤジ達を線で結び、会として面にする仕事もソーシャルワーカーならではの仕事であり、太田さん時代からの活動の結晶と私は自負している。

これからの男性介護

これからの男性介護は、職住一体が崩壊し、更に困難な様相を呈している。介護をとるか仕事をとるかという選択は、もはや女性のものだけではない。最近は特に実年層の独身男性介護者の増加が目立つ。これまで家事を担ってきた母が倒れ、彼らは、家事全般と介護を一手に、そして一気に担うことになる。仕事も責任の重い職務についていても不思議でない年齢である。

時代とともに男性介護者の層も実態も変化してくることだろう。これからオヤジの会がどのような軌跡を作るか。先のことはわからないが、いつまでも変わらず、オヤジ達の心のオアシスであってほしいと願ってやまない。オヤジの会でいつか旅行に行くこと。それが今の私のささやかな夢である。

（注）長島明子氏は、現在、NPO 法人ふぁいん副理事長として、ご活躍です。

第２部　男性介護シンポジウム

司会　斎藤真緒（男性介護者と支援者の全国ネットワーク運営委員）

登壇者

1. 井口希代子さん（上伊那医療生活協同組合ヘルパーステーションあおば所長）
2. 井出里美さん（長野県御代田町社会福祉協議会居宅介護支援事業所ケアマネージャー）
3. 戎世伊次さん（広島市安佐南区「４木の会」代表）
4. 堀本平さん（認知症の人と家族の会熊本県支部「ケアメンのつどい」発起人）

コーディネーター　津止正敏
（男性介護者と支援者の全国ネットワーク事務局長）

・開催日程　2015年３月７日
　京都タワーホテル

Ⅰ．ケアメン・コミュニティのマネジメント
―こうすれば活きる！？男性介護者の会や集い―
はじめに―シンポジウムの開催にあたって―

斎藤　真緒（立命館大学准教授）

男性介護研究会シンポジウム「ケアメン・コミュニティのマネジメント―こうすれば活きる！？ 男性介護者の会や集い」をこれから開催させていただきたいと思います。本日司会を担当させていただきます、立命館大学の斎藤といいます。どうぞよろしくお願いします。

私たちが男性介護者の集いなどを研究し始めたのは2000年代半ばですけれども、そのときは、私たちが知る限り3団体ぐらいしかなかったのが、現在では100以上に男性介護者の集いが広がってきています。この間、男性介護ネットのほうでも、いろいろな団体の交流会をしてきていますけれども、初動期はいかに男性介護者に集いに来ていただくのか、あるいは定着期は会員さんが定着してくると、逆にマンネリになってきて、どう活性化させていくのかということで、それぞれの集い、会のところでの課題というのが大きく変わってきているのが、最近の動きではないかと思っています。

これまでは、日本の中でやっぱり介護問題といえば女性というイメージが強かった。反転の力というか、だからこそ男性介護者が逆に切実なニーズをもってこういう集いが広がってきているのではないかと考えております。

今日は最初に4人の方からそれぞれの集い、会についてのご報告をいただきます。前半2人の方は女性の方で、支援者のサイドから集いの運営についてご報告をいただきます。後半は、男性介護者のお二人から当事者目線で会や集いの持つ力を報告をしていただくことになります。それでは、みなさん、よろしくお願いします。

1. 支援者ネットワークがサポートするケアメングループの運営
長野県伊那市の「男介護もいいんだに」の取り組み

井口希代子

司会：1番目の報告者の方に登壇していただきたいと思います。

ヘルパーステーションあおば所長の井口希代子さんです。どうぞよろしくお願いします。井口さんは老健施設が支援する「おとこ介護もいいんだに」というところで事務局をされております。もともとヘルパーとして活動されていますので、支援者の立場から男性介護支援についての取り組みをご紹介いただきます。それでは、井口さん早速よろしくお願いいたします。

井口：皆さん、こんにちは。ただいまご紹介に預かりました長野県伊那市「おとこ介護もいいんだに」の事務局をしております、井口希代子と申します。よろしくお願いいたします。

伊那市というのは、長野県、信州を皆さんご存じですか？北から長野市があり、中心の松本市と南の飯田市とのちょうど真ん中ぐらいの所に位置する市であります。読んで字のごとく伊那市、「いいなあ市」という感じでとても穏やかな市でございます。皆さんにとっては高遠の桜という所でも有名な市です。これから桜が咲く時期を楽しみにしております。

私は現在ヘルパーステーションの所長をしておりますが、この男性介護者の集いに参加させていただくようになった頃は、ケアマネージャーをしておりました。どちらにしても在宅介護の中で男性の方が頑張っている姿を見て、何か力になれることがあったら協力させていただきたいなと思い、参加させて頂いております。

私自身も昨年、嫁ぎ先の母を少しの間、父と一緒に介護し、看取りました。この会に参加してはいろいろと相談したり、学ばせて頂いておりました。

それでは、ご紹介に移りたいと思います。

＜理念＞地域の人々とともに安心して住み続けられるまちづくりの実践とし

て、あるべき地域包括ケアを目指し、行政とつながりながら新たな「場」としての男性介護者の集いを作っていきたい。

＜きっかけ＞2011年9月、はびろの里祭りに、ここにいらっしゃる津止先生にご講演頂いた事がきっかけとなりました。私も聞かせていただき、本当になるほどなあというふうに考えさせられました。

伊那市の中でも男性の介護者は31％に上っております。津止先生の講演を通して、自分たちも何かできればいいなという事で始めていきました。

＜発足＞2011年11月5日。名前は「おとこ介護もいいんだに」と決定いたしました。この「いいんだに」という言い方は伊那市の方言でありまして、「いいんですよ」という意味であります。

＜定例会＞開催日は毎月第1水曜日の1時半から3時まで。場所は伊那市社協の会議室で、いつも無料で貸していただいております。参加費は200円。ちょうどこの水曜日に社協の中に障害者の方たちが開いている喫茶店がありまして、おいしいコーヒーとおいしいシフォンケーキを出して頂きながら語らいをしております。

＜最も大事にしていること＞そこがしゃべりの場であること。お互いのカウンセリングの場であること。それから、癒しの場、学びの場などでもあります。

＜会の運営＞老健はびろの里が事務局やコーディネーターになっており、伊那市や南箕輪村の地域包括の方々がオブザーバーで付いてくださっております。そして、生協やほかの事業所のケアマネさんたちから男性介護者の方々をご紹介して頂きながら、会員を増やしていきたいと思っています。

＜会の内容＞はびろの里や、医療生協だけではなくて、南箕輪村や伊那市の地域包括の方々にも持ち回りでいろいろなことをやっていただこうという形になっています。

＜2013年度1年間の取り組み＞4月は簡単介護食、5月は成年後見制度の話、6月はフリートーク、7月はレクリエーション、8月は認知症キャラバンのサポーター養成講座を行いました。9月オレオレ詐欺の話、10月腰痛予防体操、」11月新聞記事から、12月は忘年会でした。翌1月は赤い羽根共同募金の助成による介護落語の会を催しました。2月フリートーク。3月は反省と来年度の計画を立てました。

＜６月フリートーク＞Ｙさんが初めて会に参加してくださいました。デイサービスを初めて使いながら、毎日毎日どこかに何回も何回も出ていってしまう認知症の妻を介護している。どうしていいのか分からなくて、心が張り裂けそうな状態であるとケアマネさんと一緒に参加されました。そして、現状を涙ながらに話されていました。自分の時間も無くなり、妻のことが心配だということでお話しされていた姿が印象的でした。

＜リクレーション＞こんな風にして体験してみました。皆さん少し心と体をリフレッシュされました。

＜忘年会＞しゃんたん鍋。お野菜を切って作るお鍋で、とても美味しく食べることができました。こんな感じの男性の料理ですね。お料理に対しては皆さんすごく、興味があるようで、ぜひ企画をしてほしいという意見も出ています。

＜2014 年度の取り組み＞お花見会や忘年会、2015 年 1 月には 1 年間の決意の一文字を書きました。3 月には赤い羽根共同募金の助成によって、津止先生をお招きしての講演会を計画しております。

また、介護施設について、これから変わって介護保険制度についてなど学習しました。その他、リクレーション、フリートークなど毎月 1 回定例会で行っています。

＜お花見＞「初めてお花見に行ったよ」とか、「久しぶりに行ったよ」とか、皆さんが喜ばれました。ケアマネージャーさんや 4 月に入職したばかりの新人職員を一緒に連れていって、協力者作りや後継者づくりも行っております。

＜マスメディア＞男女協働参画事業やマスコミから注目されていて、新聞にも幾つか載ったり、取材を受けたりしております。2014 年 12 月 13 日、岡谷でのケアメンサミットに、私たち「おとこ介護もいいんだに」からの代表としてＫさんが発表をさせて頂ただき新聞記事に載りました。

本年度の忘年会は手巻きずし会でした。会員さんが卵焼きを焼いたり、お澄ましを作られました。みんなで手巻き寿司を作って和気あいあいとしているところを取材に来て頂きました、このように『comcom』という雑誌 4 ページにわたって出して頂きました。

この会を立ち上げた古畑ですけれども、テレビ出演したり、ラジオの取材に応じたり、いろいろとマスコミの取材に応じてこの会を広めようと活動をして

おります。

＜会員数＞現在約９名です。夫介護をしている方が６名、息子介護をしている方が３名で、今現在介護をしている方が６名、OB が３名です。この会に参加していてよかったという感想を皆さんおっしゃってくださり、嬉しく思っています。

＜事例紹介＞H さん。「介護をしている時は、何度も同じことを繰り返す妻に 10 回に１回ぐらいうるさいと怒ってしまう。でもね、自分が家事をやるようになって、家のことって大変だなと分かったら、仕事ばかりをした現役時代の恩返しになると思っている。１分でも時間を無駄にしないようにめりはりを付けて毎日過ごしている。自分は絶対にぼけられない。自分が毎日、自分との闘いで、人生の修業です。」と。ずっとお１人で奥さまの介護をされていらっしゃいました。最終的には胃ろうを作られました。その胃ろうの管理も H さんがされておりました。そして、2013 年 12 月、年末に奥様を看取られました。今お一人になって、今度は自分の最期をどうしようかと。介護のことばかりでなく、財産分与の事、自分を誰が看てくれるのか、自分がどうなっていくのかという事を考えてしまうと。その寂しさを紛らわすためにこの会に来ていると。そういう形で会への関わりを続けていただいております。

S さん。おばさんの介護をされてきた方です。おばさんが亡くなって自分で成年後見の手続きをしていろいろと大変だったという事をこの会に来て話していただきました。そういう事が、一つ一つがみんなの学びになっています。

先程の Y さん。「1 年半たった今は、介護が決して楽になったわけではないですが、本人のびっくりするような行動が起こってみても仕方がない、それは病気なんだからと、今の奥さまの姿を受け入れられるようになりました。」と、笑顔で話してくださるようになりました。サービスにも慣れて少し落ち着いたということもありますけれども、この会に来て、同じ気持ちを分かち合える、聞いてもらえるというところですごく力になっていると、毎回参加してくださっております。今は自分の趣味のリフレッシュの時間ももてるようになり、本当に１年前と変わって元気になられました。

岡谷で話をしてくれた K さん。2014 年９月、お母さんを看取られました。「自分はこの会で皆さんに助けられた。母は介護保険を通して多くの人たちに助け

ていただいた。本当にうれしかった。」と会に来てお話してくださいました。

＜最後に＞あるべき地域包括ケアに向けて医療生協がコーディネーター役、伊那市や南箕輪村との協働という仕組みづくりが長続きの秘訣ではないかと思っております。本当に大事にしていることは、対話の場であること。学習もしますが、必ず、皆さんが一言ずつ現状や思っていることをお話しできる時間も設けております。新しい人たちをどういうふうに見いだしていくかが現状の課題で模索しております。

私も以前はケアマネであり、今はヘルパーという立場で在宅に行きながら男性で介護されている方々にこの会にお見えになりませんかと声を掛けさせていただいておりますが、なかなか足を運んでいただくところに結び付きません。また、以前、若い方に来ていただいた事がありますが、やはり忙しいという事もあって、なかなか長続きができない状況であります。この先、こういう若い方たちをどういうふうに救えるのかなということが課題だと思っております。

また、来ていただけるのを待っているのではなく、今いらっしゃるOBの方たちが来られない方たちのところに出向き、お話を聞いてあげるスタイルもできたらいいかなというふうに考えています。そこをきっかけにまた少し出てくるということができたらいいかなと今、模索して頑張っているところでございます。

以上になりました。長い間、ご静聴ありがとうございました。今度3月に津止先生、よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

資料

(1) プロフィールシート

(2)「男介護もいいんだに」(雑誌『COMCOM』掲載記事)

＜資料（1）＞

2015年３月７日（土）男性介護シンポジウム

プロフィールシート

№1　　（記入者：古畑克己）

1.団体名	男性介護者と支援者の会「おとこ介護もいいんだに」
2.代表者	事務局　古畑克己
3.所在地	399-4501　長野県伊那市西箕輪2758-1
4.連絡先	電話　0265-77-0105
	FAX　0265-77-0104
	E-mail　furuhata@kamiina-mcoop.com
5.設立・活動時期 （貴会のチラシパンフ資料等を添付してください。）	①2011年11月発足 ②設立のきっかけ・動機 2011年9月、事務局・古畑が事務長を務める老健はびろの里の“はびろの里まつり”で、津止正敏先生を講師に介護講演会「おとこが介護をする時代」を企画しました。その講演会に来ていた伊那市と南箕輪村の包括支援センターの職員で「ここにも必要、ぜひやってみよう！」と意気投合し、医療生協が事務局を引き受け、各包括支援センターがサポート役という仕組みで、マスコミ等で参加を呼びかけました。 ③貴会のアピールポイントやスローガン、キャッチコピーなど キャッチコピー「同じ立場だから　わかり合える　わかち合える」当事者同士の対話を大切にしています。医療生協と近隣に市町村の協働事業であることが長続きの秘訣です。
6.会員数 （男性介護者の事業に参加する人について、大凡で結構です）	＊約（　16　）人、（内、夫　6　人、息子　4　人） ＊内訳：①介護当事者（　6　）人、②介護者OB（　3　）人 ③支援者・専門職（　6　）人、④その他（　1　）人 ＊専門職種［　ケアマネ、介護福祉士　］
7.活動内容 （チラシやパンフなどがあれば添付してください）	例会の開催日や大まかな内容（プログラム） 毎月第一水曜日13：30～15：00（伊那市社会福祉協議会の会議室） 会費：200円（伊那市社協内の喫茶でコーヒー・スポンジケーキ） 医療生協・伊那市・南箕輪村の持ち回り版で
8.活動資金	会　費［　有　・　(無)　］（有の場合　円） 助成金［　有　・　(無)　］（有の場合　円） その他［　有　・　(無)　］（有の場合　円）

9. 協力・連携団体	伊那市包括支援センター、南箕輪村包括支援センター 上伊那医療生活協同組合

№2

10. 活動してよかったこと（具体的なエピソードがあれば添えてください）
・お母さんを介護してきたＫさん。2014年10月に自宅で看取りました。この間、介護疲れなどで精神的にも追い詰められてきたＫさんでしたが、定例会でＨさんから「自分の体を大切にするんだよ」と励まされました。Ｋさんは、「あの時の言葉があったから、やってこられた。この会に感謝しています」と振り返ります。 ・施設拒否、受診拒否の激しい妻を自宅で介護されてきたＹ様。2013年、伊那市のケアマネさんの紹介で参加されました。その定例会で、今までの介護を語りながら、堪え切れず咽び泣くＹさんの姿が忘れられません。あれから1年近く経ちますが、今は、「介護が楽になったわけではないですが、病気なんだからと今の妻を受け入れられるようになりました」と日頃の介護の様子を笑顔で語ってくれます。 ・当事者の皆さんもそうでうすが、支援者の私達も学びの場になっていることが、長続きの秘訣です。
11. 活動して困った（困っている）こと（具体的なエピソードがあれば添えてください）
・マスコミ等で頻繁に取材等を受けてきたことで、想像以上の反響がありましたが、その割には会員が増えません。50台の息子介護の当事も者を参加したいがどうしたらいいでしょうか。
10. これからやってみたいこと（活動や組織のこれからの方向性）
・日常的に介護者が集える「介護者カフェ」を作りたい。 ・近隣市町村との交流と、現在やっていない地域でも男性介護者の会づくりが進むように支援したい。
12. その他

★お持ちのチラシやパンフレット、広報資料等をお送りください。資料集を作成したいと思います。

＜資料（1）＞

日本医療福祉生活協同組合情報誌『COMCOM』
2015年2月号(№.570)から抜粋

協同のある風景 225

「おとこ介護もいいんだに」

「ジューッ」という音と、卵焼きのおいしそうなにおいが部屋中に広がります。12月3日、長野県伊那市にある社会福祉協議会の施設「福祉まちづくりセンター」で、男性介護者と支援者の集い「おとこ介護もいいんだに」の定例会が開かれました。

2011年に始まり、毎月第1水曜日に開催している定例会は今年で4年目を迎え、息の長い活動になりました。14年最後の今回の集まりは、忘年会。参加者が手巻きずしを作って、料理の腕を振るいます。

講演会がきっかけに

この会の呼びかけ人は、上伊那医療生協の老人保健施設「はびろの里」事務長の古畑克己さん。きっかけは、11年9月に「男性介護者と支援者の全国ネットワーク」を主催する立命館大学の津止正敏教授を招いて講演会を開催したことでした。参加していた行政や社会福祉協議会の職員たちと、「男性介護者の会をつくろう」という話になり、古畑さんが事務局を引き受けてスタート。会の名前は、伊那市がある長野県南部の通称「伊那谷」から取って「おとこ介護もいいんだに」と、参加者がつけました。

地域包括支援センターや社会福祉協議会もいっしょに

会には、伊那市と南箕輪村の地域包括支援センターの職員も参加しています。「市や村が呼びかける介護者の会は以前からありましたが、参加者のほとんどが女性で、男性にどう参加してもらうかが悩みどころでした」と、伊那市地域包括支援センターの「みすず支援センター」職員・大村妙子さんはいいます。「介護していると、家の中にこもりがちになってしまいます。特に、男性介護者は一人で悩みを抱える方が多いので、どうしたらいいかと考えていたんです。男性だけの会は、とても良いアイデア。こういう集まりは貴重です。ケアマネジャーの連絡会でも紹介しています」

伊那市地域包括支援センターの「みすず支援センター」職員の大村妙子さん

上伊那医療生協の老人保健施設「はびろの里」事務長の古畑克己さん

たそうです。「僕らの時代は、『男は台所に入っちゃいかん』っていわれたんだよね。家内も僕が台所に入るのを嫌がったから、何もしなかった」と振り返ります。介護をするようになって料理を始め、今では見事な卵焼きを披露するほどの腕前になりました。

母親を3年間介護し、看取った小林清人さん。「自分と同じように苦しい思いをしている介護者の悩みを聞くことはできるし、実体験を話すことで役に立つことがあるかもしれない」と、最近では頼まれて、多くの人が集まるシンポジウムでご自身の介護体験を発表することもあるそうです。

原利一さん

山川茂樹さん

小林清人さん

林剛さん

※算定月の前6か月間の退所者総数のうち、当該期間内に退所し、在宅で介護を受けることになった者（当該施設での入所期間が1か月超の者に限る）の占める割合

老人保健施設「はびろの里」にも変化が

地域のために何かしたいと男性介護者の会を始めたことで、変化が生まれたと古畑さんが説明してくれました。「地域包括支援センターと協同してとりくんだことで、行政と信頼関係を築けました。また、要介護者のご家族から直接お話が聞けるのは、施設の事務長として地域への視野が広げられるすばらしい学びの場です」

それまで在宅復帰率※が10％前後だった老人保健施設「はびろの里」。12年度の介護報酬改定に向け、「在宅復帰の強化をめざす施設にかじを切ろう」と方針化しました。ちょうど同じ時期にスタートした男性介護者の会。「地域貢献・協同のとりくみと、同施設がめざすあるべき地域包括ケアの方向がかみ合ってきました。偶然でしたが、とてもいいタイミングでした」と、古畑さんは当時を振り返ります。こうして同施設の在宅復帰率は現在、60％を維持するまでになりました。

今回、はびろの里の若い職員2人が初めて参加。「参加者の話を聞いて、家で介護している人はこういう気持ちなんだなと、とても勉強になりました」と北原友佳さんは語ります。相談員の伊藤彩織さんは、「男性が外に出て、心のよりどころになる場所があることは大切だと感じました」といいます。

介護者カフェができたらいい

「こういう会が、あちこちにできたらいいと思うんです。男性介護者が集まれる場は、まだまだ少ないんですよ。さらに、月に1回ではなくて、日常的にふらっと寄れるような『介護者カフェ』ができたらいいでしょうね」と、古畑さんは今後の夢を語ります。

津止教授は、「『おとこ介護もいいんだに』のような活動は全国に広がっています。一人で介護を抱え孤立しがちな男性介護者にとって、同じ境遇の仲間と出会える貴重な場。苦しいのは自分一人じゃないと共感し合える活動です。身近なコンビニのように、各地で数多くの活動が始まればうれしい」と、全国の男性介護者にエールを送ります。

（編集部）

写真：中村香代

上伊那医療生協

●設立年月日	1988年10月30日
●組合員数	2万2,823人
●出資金	8億9,522万5,000円
●支部・班数	22支部　165班
●事業所数	病院1　医科診療所1 介護関連17 （在宅訪問診療所1含む）

※ 2014年12月17日現在

人と話すことがいい

奥さんの介護をしている山川茂樹さんは、ケアマネジャーの紹介で参加するようになりました。「生活は変わらないんだけどね、ここに来ると心が癒やされるんです。今まで誰にも話せなかった苦しみがね、ここで話すことで解決できるんですよ」と思いを語ります。

原利一さんは、95歳のお母さんと二人暮らし。今はまだ大丈夫ですが、介護が必要になるときがくるかもしれない。そうなったら困るからと参加しています。「ここには、仲間がいるから安心できるんです。話も聞けて参考になるし、自分一人じゃない、孤独じゃないんだと思えるんだな」

林剛さんは、奥さんを3年半介護し、自宅で看取りました。「家での経験を話すことで、参考になったといってもらったり、人の話を聞いて、なるほどなぁと感心することがあったりね。それがいいよね」。林さんは、料理も洗濯もやったことがなかっ

5／手作りの手巻きずしとノンアルコールビールで「いただきます」 6～8／調理から配膳まで協力し合って 9／初めて参加した「はびろの里」の職員・北原友佳さん（左）と相談員の伊藤彩織さん（中央）

2. 社会福祉協議会のケアマネージャーが支援する集い 長野県御代田町のケアメングループの実践

井出　里美

司会：ありがとうございました。続きまして、第2番目の報告者にお願いしたいと思います。報告は「社協居宅介護支援事業所のケアマネが支援する集い」ということです。ご報告いただくのは、このつどいの発起人の一人であります、ケアマネージャーをされている井出里美さんです。井出さん、どうぞよろしくお願いいたします。

皆さん、こんにちは。先ほどの発表の井口さんも長野県からということですが、私は長野県の東側にあります、御代田町というところから来ました。社会福祉協議会で主任ケアマネージャーをしております、井出里美と申します。よろしくお願いします。

御代田町ってどこかなと毎回、全国ネットワークの中で言われるんですけれども、軽井沢町と小諸市の間にはさまれている浅間山のふもとに位置する人口約1万5,000人の小さなまちです。高齢化率でいいますと、22%ということで比較的若いまちではあります。そういうところから来ましたので、よろしくお願いします。

それでは、私はプロフィールシート（資料参照）に沿ってお話ししたいと思います。

設立したのが、平成23年1月でした。私たちはケアマネージャーという仕事をしていますので、以前から社協としては介護者の集いをしていたんですけれども、出席されるのは圧倒的に女性が多くて、ぽつぽつと男性の方がいらっしゃるんですけれども、やっぱり女性のパワーに押されて自分の意見を素直に言うような状態ではなかったというのを見ていました。どちらかというと、優しいので、女性介護者のすごい強い訴えを聞くほうに回っているのが男性介護者かなという印象でおりました。

それで、私たちが訪問に行って話を聞いていくなかで、こんな方たちがいる

よということで事務局長に相談しましたら、事務局長の勧めもありまして、社協全体の事業というのではなく、直接かかわっているケアマネージャーの事業として男性介護者の会を立ち上げたらどうだということで、ちょっと背中をぽんと押されたような状態で、「じゃあ、ちょっとやってみようかな」ということで発足しました。

アピールポイントとしましては、普段かかわらせていただいている担当ケアマネがそれぞれチラシを持って訪問して参加を呼びかけて、ぽつぽつ集まってきました。おかげさまで出席率はいいです。

会の開催日はケアマネージャーが運転手になってそれぞれのお宅にお邪魔して連れてくるというか、参加していただくために送迎をしております。

交流会の最中は主体的に動くのではなく、そうっと寄り添って話を聞いて、何となくケアマネの出番かなと思ったときにぽっと何かちょっとヒントになるようなことを言ったりということで、まずは男性介護者同士で交流できるような雰囲気をつくりたいかなと思って活動しております。

会員数ですが、13 名のうちだんなさん側の介護者さん 11 人、息子さんが 2 人ということで、息子介護の方が少しこれからの課題なんですけれども、もう少し参加していただけたらいいなと思っております。

最初のころは、社協のある地域福祉センターの会議室でお弁当を取って、悩みとかいろいろなことを語り合っていましたけれども、その後、ちょっと学習会みたいなこともしようかなということで認知症と家族の会の長野県支部の副代表さんが来ました。それはこの場面なんですけれども、これは男性介護者さんたちだけではもったいないので、いろいろな方たちに声を掛けて学習会をしました。人権擁護委員さんとか、民生委員さんも声を掛けて、そういう方たちにも知っていただこうと思って、こんなような学習会を開きました。

男性介護者の集いも何回か会を重ねると顔見知りになってきて、「たまには泡の出るものでも飲んで語り合いたいな」みたいなことをぽつぽつと言い出すようになって、「じゃあ、今度はお酒でも酌み交わしてそれで語り合おうかな」ということになり、それが最近は毎回になり、どちらかというとサロン化しているというか、そういう介護者の集いになっております。

昨年末に「地域の縁側あさひ」というものを社協で立ち上げました。空き家

を借りて子育てのお母さんからお年寄りまで誰でも集えるという場所を今、全国でいろいろな地域の縁側事業というのをやっているんですけれども、私たちそこをお借りして活動するようになりました。以前は食堂でご飯を食べながら、お酒も飲みながらということでやっていたんですけれども、テーブルごとに分かれてしまっていましたが、地域の縁側に場所を移しましたら、もう少し小さい輪というか、こたつ一つのところに男性介護者さんたちが十何人びっちりと囲むようにくっつき合って話をしている姿が見られまして、「これもいいかな」と思いました。今はそこの地域の縁側あさひで活動したらどうかなということで、介護者さんたちからも、「ここがいいわ」という意見が出て、これからはそこを拠点にしてやっていこうかなと思っております。

世代もさまざまですので、満州とかに開拓に行った人たちが中には居て、もうちょっと世代が若くていらっしゃる方が、戦争中の話を聞いて、「まあ、すごいことをしたなあ」と感心して話を聞くなど、そんな介護以外の話も交流の中で広がるようになってきました。

活動して困ったことということですが、ケアマネージャーですので、男性の方たちが出やすいとなると、前もってショートステイを取ってあげるとか、それからデイサービスの利用日に当てるとか、どんなメンバーさんが参加するかなということで、少しそういうところでお手伝いするようにしております。そうすると、ちょっと昼間お酒を飲んでも、お昼寝をして少しするとおばあちゃんたちとか、お母さんたちが帰ってくるというような状態につくれば出やすいかなと思って、そんなふうに支援しております。

これからやってみたいことなんですが、現在は平日の日中の集まりになっています。お昼を食べて、お酒も少し飲んで、日ごろの疲れを分かち合うという活動が主になっています。けれども、男性介護者さんたちも高齢化になってきておりまして、体の悩みというか、例えばおしっこの問題とか、それから終活の問題とかそんな私たちならでは、声を掛けられるような課題を少し投げかけて男性介護者さんにも、息子さんたちがいたり娘さんたちがいる中で、ご家族の言えないところをケアマネとして、こういうような問題はないですかということで自然に話ができるような場にも、食堂じゃないから、地域の縁側あさひだから、ざっくばらんに言えるのかなと思って、これからはそんなことも言っ

ていきたいなと思っています。

それと働き盛りの男性介護者さんたちへの支援が課題です。私たちのケースの中でも、責任感がとても強くて、ケアマネへも相談せず離職してしまったケースがやっぱり１ケースありました。それはとてもショックだったんです。そういう方たちも集えるように４月から始めようかねと言っていますが、日曜日どこかでケアマネが交代して地域の縁側あさひに居るか、もしくはちょっと声を掛けて、ここでやらないかということで。日曜日だと仕事をしている方たちも出られるかなと思って、そんな活動をしていきたいかなと思っています。

ですが、私たちが担当ではない方も来ています。ですので、また、包括支援センターとか、それからほかの御代田町に関して担当しているケアマネさんに毎回、毎回声を掛けて、「どうか出やすいように声を掛けて一緒に参加してください」と毎回声を掛けています。

それとは別に男性介護者さんに限ったことではなく、地域のサロンなどにも最近は出掛けるようになっています。そうすると、向こう側からこんな方が困っているみたいですよとか、こちらから話しかけなくても、向こう側から近寄ってくれるようになっていますので、ケアマネージャーの業務だけではなく、地域のサロンに出掛けたりとか、そういったところにも顔を出して、より早く救いたいなと思っています。

昨年末のことですが、男性介護者の会のメンバーでありました、Ｕさんが急性の病に倒れてお亡くなりになりました。その方がよく映画が好きで、去年だと『永遠の０』というのが話題になって、「それを見に行ったんだよ」と言ったら、「じゃあ、みんなで見たいね」とか、「じゃあ、映画館に出るのもいいな」という声が出て。どうしても介護者さんたちってうちの中にこもっちゃうことが多いと思うんです。ですが、私たちをきっかけに社会とつながって、社会に出ていってもらって、いろいろなことを経験してもらって、「あ、自分は一人じゃないんだな」ってたくさん思ってもらいたいなと思って、今度は映画館とか、そういうところにも出ていきたいと思っています。

では、簡単に画像を見ていただいて。これは学習会の様子で、グループディスカッションをしているんですが、立っている男性は人権擁護委員さんです。その隣にいるのが、うちのケアマネージャーですが、地域の方たちとこうやっ

て話し合いをして、認知症の状態とか、悩みとかを聞いていただいています。

これが地域の縁側あさひです。ここの持ち主さんはもうお亡くなりになりましたが、こんなふうに肩を寄せ合って。これはクリスマス会の様子です。さりげなくケアマネが座って話をしているような状態です。こんなすてきな笑顔を見せていただけます。このクリスマスツリーもケアマネが持ってきたんです。

これは「つけば」というのを皆さんご存じですか。川のところで、川魚を食べる小屋みたいなところですが、夏には行こうということになって。手前の方は息子介護の方なんですけれども、お魚を焼く役に自然になっているんです。

そんなことで活動しております。ご静聴ありがとうございました。

資料

(1) プロフィールシート

(2) 男性介護者の集いのチラシ

＜資料（1）＞

2015年３月７日（土）男性介護シンポジウム

プロフィールシート

№1　　（記入者：　井出　里美　）

1.団体名	男性介護者の集い
2.代表者	御代田町社会福祉協議会ハートピアみよた　　居宅介護支援事業所
3.所在地	長野県北佐久郡御代田町（みよたまち）大字御代田1772-1
4.連絡先	電話　0267-32-1100
	FAX　0267-32-1111
	E-mail　hpm-caremane@aw.wakwak.com
5.設立・活動時期 （貴会のチラシパンフ資料等を添付してください。）	①平成23　年　1月発足 ②設立のきっかけ・動機 以前から介護者の集いはあったが、出席されるのは圧倒的に女性が多い。 出席してくれる男性も中にはいるが、女性のパワーに押され自分の意見を言えない。やさしいから女性介護者の訴えを聞く方に回っている。介護される側の支援はあるが介護する側の支援はなかなか無い。事務局長からの勧めもあり、社協の事業では無く、実際訪問してケアマネとして男性介護者と関わっていく中で、ケアマネの事業所の事業として、立ち上げました。 ③貴会のアピールポイントやスローガン、キャッチコピーなど 普段関わらせていただいている、担当ケアマネそれぞれが、チラシを持って訪問し、参加を呼び掛けています。おかげさまで出席率は良いです。会の開催日は、ケアマネが送迎を行い、アルコールも飲んで発散できるように環境を設定しています。基本、男性介護者同志の交流をしてもらいますので、ずっとそばにいるわけではありませんが、さりげなく見ていてそっと寄り添い、しっかりその方をねぎらい・・という気遣いをしているつもりでいます。
6.会員数 （男性介護者の事業に参加する人について、大凡で結構です）	＊約（　13　）人、(内、夫　11　人、息子　2　人) ＊内訳：①介護当事者(　11　)人、②介護者OB(　2　)人 ③支援者・専門職(　6　)人、④その他(　　)人 ＊専門職種［介護支援専門員（介護福祉士、看護師、認知症ケア専門士主任介護支援専門員）時々、町から包括支援センターのケアマネが来る］

7. 活動内容 （チラシやパンフなどがあれば添付してください）	例会の開催日や大まかな内容（プログラム） 第１回目は、社協のある地域福祉センターの会議室で、お弁当を取り、語り合って悩みなど聞いていました。その後何度か会を開き、認知症と家族の会の長野県支部から副代表を呼んで講演会を開く事もしましたが、 「たまには泡の出るものでも飲んで語りあいたいなあ」という介護者さんたちの本音が出ましたので、堅苦しくなく、口が滑らかになるよう外食する楽しみとそこにお酒を加えて集まるようになりました。暑気払いで「つけば」に出かけたり、忘年会で焼き鳥屋さんに行った事もあります。昨年末より、最近は１か月半に１回くらいのペースで、地域の縁側「あさひ」で活動するようになりました。ここは、住んでいない民家を社協がお借りして、誰でも集うことができる縁側事業として活動している場所です。数人、女性の方も来ていますが、男性同士で一つの炬燵に肩を寄せ合って、介護の話し、戦時中の話しなど・・交流する場所になっています。もちろん！お酒はつきものですが、縁側に場所を移したら、ケアマネにばかり任せないと、今後はお酒を付けたりと自主的に動いて下さるといわれます。みなさん、地域の縁側「あさひ」が気にいったようですので、活動の拠点をここに移していきたいと思います。
8. 活動資金	会　費［　有　・　(無)　］（有の場合　　円） 助成金［　有　・　(無)　］（有の場合　　円） その他［　(有)　・　無　］（地域の縁側あさひの場所使用代一人 50 円）
9. 協力・連携団体	御代田町地域包括支援センター 御代田町を担当している他事業所のケアマネ

№2

10. 活動してよかったこと（具体的なエピソードがあれば添えてください）
一人一人に寄り添い話しを聞く中で、みんな大変なんだな、自分だけではないと介護者自らが思える機会を得られたこと。元気な笑顔で、「また頑張ろう！」「会う機会を楽しみにしているよ」と言っているのをそばで見られること。 ケアマネという立場から言うと、自宅訪問の際、なかなか表現されない男性介護者さんたちから、本音が聞けるチャンスをもらった事。（お酒の力もちょっと借りて…） そして「介護するのは大変だが、介護される側はもっとつらいだろうな・・」としみじみ言うやさしい皆さんの言葉に私たちが励まされ、感動をいただいている事。 この地域で活動をはじめ、最初はどのように会をすすめていったら良いか迷ったが、上田市で活動しているシルバーバックの会の方々に相談出来、そこでも出逢いが生まれた事 ・・そこからまた、発展し、声をかけていただき、長野県の活動団体のみならず、お隣山梨県のやろうの会の方々とも知り合いになれて、「やまぐにネット」の活動に参加できている事。 当事者が介護者 OB と関わり話をすることで少し先の事にも目を向け、大変な今の介護を、貴重な時間としてとらえる事が出来ている。 メンバーが、集まりをとても楽しみにしており、ご自宅への訪問（モニタリング）の際にも介護者の集いはいつ？という話をしたい様子があるとき。 メンバーが固定化していて、メンバー同士のつながりが深くなり、同年代の人同士の楽しい話が出来ている。
11. 活動して困った（困っている）こと（具体的なエピソードがあれば添えてください）
特にありません。 会の活動日をデイサービス利用日に合わせる。ショートステイを計画に入れるため、ケアマネ同士でショートステイを同じ日に設定するなどの工夫をして参加できるようにしていますが、ショートが取れないと介護者が出かけられなくなるので困ります。

10. これからやってみたいこと（活動や組織のこれからの方向性）
現在、平日の日中の集まりです。お昼を食べて、お酒も少し呑んで、日ごろの疲れを分かち合うという活動が主になっていますが、介護者自身の体の悩みとか（たとえば、尿失禁についてとか‥）終活等も話題に入れつつ、話しあうきっかけを作りたいと思っています。 働き盛りの男性介護者さんたちへの支援が課題です。責任感がとても強く、ケアマネへの相談もせず、離職してしまったケースが残念ながらありました。 地域の縁側「あさひ」にて、土日いずれかでケアマネが交代でいるようにして、仕事をされている方も集えるように環境設定をしていきたいと考えています。 しかし、日々の目の前の仕事に追われなかなか実行できませんが・・。（反省） まずは、働き盛りの介護者さんたちを集めるのに、また一人一人声掛けをして担当ケアマネが誘いに行こうかとも思っています。 　私たちは、ケアマネという立場から、直接声を掛けられるということが出来ます。しかし、私たちが担当している方以外でも、広く周知して他にも必要としている方たちが参加しやすいようにしていきたいと思っています。ケアマネの研修、地域ケア会議の場でも日程をお知らせしていますが、なかなか新しい方の紹介がありません。そういう中、最近になって地域のサロンにもケアマネが参加するようになりましたので、相談されることが多くなりました。その中で、介護に悩んでいる息子さんがいるという情報もいただきました。地域の方と顔見知りになることで、専門職以外の方からも気軽に相談されることは、うれしいことです。今後も丁寧に関わっていきたいと思っています。 ゆくゆくは、世代間交流もできたら良いなと思います。 　昨年末、男性介護者の会のメンバーでありましたＵさんが急性の病に倒れ、お亡くなりになりました。その方が大好きだったのが映画で、いつかみんなで映画を見に行こうよと言っていたのを思い出します。ぜひ、都合をつけて映画も見に行きたいです。このように家にこもらず町に出て、社会と接点を持つ機会をたくさん作り、孤独感を感じさせない関わりをしていきたいと考えます。
12. その他

★お持ちのチラシやパンフレット、広報資料等をお送りください。資料集を作成したいと思います。

＜資料（2）＞

男性介護者のつどい

男性介護者の皆様、日々の介護お疲れ様です！同じ立場の者同士、お互いにつどい、語らい、リフレッシュできるよう今回も地域の縁側「あさひ」にて開催いたします。どうぞご参加ください！

記

１.日　時　　平成 27 年　3 月　25 日（水）

１１時 00 分～１４時００分ごろまで

２．場所　　地域の縁側　「あさひ」

３．参加費　　昼食代（実費）

「あさひ」場所代 50 円

４．その他　　お迎えが必要な方は、下記にご相談ください。

お問い合わせ先：御代田町社会福祉協議会　居宅介護支援事業所

ハートピアみよた　　３２-１１００

以上

3. 介護する男性が主宰するケアメングループ 広島市安佐南区「4木の会」の取り組みから

戎　世伊次

司会：井出さん、ありがとうございました。支援者からの報告が2本続きましたが、次は、男性介護者自身が運営している実践です。広島県安佐南区の男性介護者の会「4木の会」の代表をされている戎世伊次さん、よろしくお願いします。

失礼します。私、広島の安佐南区、ご承知のように昨年の8月に土砂災害に遭ったところでございます。私、4木の会と申しますのは、毎月第4木曜日、集いをやっています。場所は安佐南区の福祉総合センター6階でやっております。現在、男性介護者が登録メンバーが46名で平均年齢が74歳です。老老介護ですね。

そこで、毎月やってはいますけれども、お集まりいただいているのが、平均大体14～15人ぐらいですかね。内訳を申しますと、夫の方が、奥さん、親御さんを介護されている方が23名、息子さんが介護されている方が4名、介護OBが5名です。支援者は専門職の方が12名、その他2名ということで46名ということでございます。その他の2名というのは、現在認知症にかかわっていない家族を心配して勉強のために参加しているというのが2名でございます。今後、こういった方が多くなるのではなかろうかなと思っております。

私どもは設立したのが平成23年8月でございます。それから1年半年ぐらいたちまして、同じような集いをしていましても、座談会をやっていましても、なかなかこれは先々行き詰まってしまうのではなかろうかということで、いろいろ世話をしているものが2～3人いますけれども、話をする中で、これじゃあどっちみち、先々人数は固定化して少なくなって、だんだんじり貧になるのではないかなというふうな悩みがありました。

その中で安佐南区に10カ所公民館がございますけれども、たまたま私はその1カ所の公民館に講演会といいますか、そういったところで私も参加してお

りました。これはちょっと公民館を利用する手はないだろうかと思いまして、公民館の担当者とお話しして、男性介護者の体験談のトークを地域の皆さんに聞いてもらおうではないかということで始めました。

そうして話をしている最中にやはり隣接する公民館のほうからたまたま昨年の認知症の人と家族の会の出前講演がその公民館であったそうです。そこで行政の担当者がやはり聴講しておりまして、「これは何かできんだろうか」というお話がありまして、私のほうに話がございました。早速、そちらの公民館の担当者とお話しするなかで、ぜひやらせてほしいというお話を申し上げ、先にお話ししました公民館のほうは2番手でお願いしました。現在10カ所のうちの8カ所が既に終わっております。

当然、介護者は介護トークというのは皆さん、嫌がります。「なんでわしの地域で介護トークを話しせないけんのか」というふうなお話がございましたけれども、だんだんだんだん会を進める中で、「実はわしやりたいんだが」と「やらせ」というお話がございまして、本当にあのときは喜びもひとしお、驚きもありましたね。よく手を挙げてもらったなというふうなことで、その介護トークをお話ししていただきました。

それからもう8カ所済ませて、その間に地域の社協さん、また、町内会の会長さん、大学では広島文化女子大のほうから福祉関係の学生さんに家族の気持ちを伝えてほしいというご要望がございまして、そういったことで、皆さん、いろいろお願いをしまして、介護トークをさせてもらっています。

それで一番喜んだのは、私どもだけではなくて、会員さんの皆さんが、発表する、原稿を書くのは、まとめて書いて発表する前にいろいろ考えを書きますよね。最初はきつい、きついとおっしゃっていましたけれども、だんだんとこれに慣れてきまして、最初は緊張していまして、いくらか終わる間近になって、終わった後になりますとやはり達成感。そういうことがやはり皆さん、目に見えて分かるんですね。非常に喜ばしいことだったと思います。

また、突然、体の調子が悪くなって当日介護体験のトークができないからというお話があるという気持ちがありまして、2人ほどスペアをいつも準備をしておりますけれども、まだいまだかつてそういうふうなスペアを利用することがなくて、非常に喜んでおります。

それと現在、一番困っておることは、やはり私どもは行政の下におりますけれども、行政というのはどちらかといえば、融通が利かないというか、同じ福祉のほうの仕事に携わっているのにもかかわらず、隣合わせに座っていてもなかなか意思の疎通がうまくいっていないというのが多々見られます。そういったときには、必ず行政にその旨を申し出をして、ぜひその辺のところを善処してほしいとお話をしております。

現在また、こういった介護体験を通じながら、地域の方にわれわれ認知症の家族の方、また、介護しておられた方も、やはり地域にとって迷惑を掛けるということは随分あると思うので、そういった意味ではお願いもしたり、協力もお願いしています。

このたび、ことしの秋口になろうと思うんですけれども、安佐南区の健康長寿課のほうで、大きな認知症に関するイベントをしたいと。これは安佐南区の文化センターで開催されるそうですが、これにもひとつ携わってくれないだろうか、参加してくれないだろうかというお話がございます。誠に私どもにとっては非常に喜ばしいことで、ぜひともこれをやっていこうとみんなで話をしておるような状態です。

こういった介護というのは一番きついですしね。われわれが話をしていましても、なかなかいいお話はないです。身近に死というのがちらついております。そういった意味からいけば、こういったことについてはやはり社会に、地域に分かってもらいながら、理解してもらいながら、また認知症の介護をしておる身でありますので、そのところをやはり認知症に対する啓蒙、啓発といいますか、そういったことを働き掛けていかなければいけないんじゃないかなと常々思っております。

資料

(1) プロフィールシート

(2) 男性介護者 4 木の会が行ったイベント紹介

＜資料（1）＞

2015年３月７日（土）男性介護シンポジウム

プロフィールシート

№1　　（記入者：　戎 世伊次　）

1.団体名	広島市安佐南区男性介護者「4木の会」
2.代表者	戎 世伊次
3.所在地	〒73101 広島市安佐南区中須1丁目3813
4.連絡先	TEL　082-831-4942
	FAX　082-870-2255
	E-mail　seiji0125@hi2.enjoy.ne.jp
5.設立・活動時期 （貴会のチラシパンフ資料等を添付してください。）	①2011年8月発足　　現在　会員の平均年齢　74歳 ②設立のきっかけ・動機 2011年6月の中国新聞記事【男が背負う介護「私のいっぽ」】にあった「男の介護者同士、愚痴を言ったり助言し合ったり出来る仲間がつくれたら、どんなにうれしいだろう。孤立したくない。障害があっても介護していても、地域や社会と繋がっていたい。一人じゃないと言う安心感が、明日を生きる力になるから」ということ。当時介護生活の中で、「男同志、愚痴をこぼし、弱音を吐きたい、」「男性介護者の仲間を」と考え現在に至っています。
6.会員数 （男性介護者の事業に参加する人について、大凡で結構です）	＊約（　46　）人、（内、夫　23　人、息子　4　人） ＊内訳：①介護当事者（　27　）人、②介護者OB（　5　）人 ③支援者・専門職（　12　）人、④その他（　2　）人 ＊専門職種［安佐南区健康長寿課保健師、地域包括支援センター、社会福祉士、介護福祉士、ケアマネマイスター、学区社協、民児協］
7.活動内容 （チラシやパンフなどがあれば添付してください）	例会の開催日や大まかな内容（プログラム） 定例会は、毎月第4木曜日午後1時より3時まで安佐南区総合福祉センター6階にて開催。内容については、下記参照。 ①イベント情報。近郊の福祉及び認知症、介護関係についてのイベントを紹介。 ②書籍紹介。例「ボケてたまるか！」62歳記者認知症早期治療実体験ルポ、著者　山本朋史氏　発行所　朝日新聞出版　等々平均3冊程度紹介 公民館活動として。安佐南区内の公民館は、10ヵ所あり現在8ヵ所でイベント実施済。残りの2ヵ所については、本年6月までに実施予定。全ての公民館を実施後、それぞれ地域の地域性と特徴を勘案し2回目以降のイベントに反映させる。

	定例会を除くイベント ①地域学区社会福祉協議会より、高齢化の進んでいる地域の集会所にて、「介護体験を聞こう」と言うテーマにて男性介護者の体験談を話し地域の支援と協力をお願いする。発表者2名、②広島医療生活協同組合（医療生協）「ヘルパーステイション　虹」よりヘルパーとして従事して居られる方々の勉強会の一環、『家族の介護』「母、妻の介護は、介護者の気持ち、家族の思い」ホームヘルパー　70名　2日間にて実施　発表者　4名 ③広島文教女子大学人間福祉学科1年必須科目1学年50名。「家族の介護者としての思い、サポーターへの支援及び協力のお願い」と言うテーマにて講演をする。発表者1名。④アクティブシニア　脳イキイキ塾　～認知症の理解と予防～。古市公民館主催にて参加　発表者　1名。⑤安佐北区の健康長寿課より紹介にて。“男性”も“女性”も支え合う介護のカタチ。安佐北区　口田公民館主催に参加　発表者　2名。⑥会員相互の親睦を兼ね懇親会。不定期ではありますが食事会（和食、お好み焼き）昼食時に実施。食事後、認知症カフェ“山水”にて懇親会。⑦「パソコンをつっこう会」を計画中。目的は、情報の収集、メール等による会員各位の連絡、趣味を生かす為の手段として、また認知症予防として企画中です。
8. 活動資金	会　費［　○有　・　無　］（定例会の都度100円お茶代として徴収） 助成金［　有　・○無　］（有の場合　円） その他［　有　・○無　］（有の場合　円）
9. 協力・連携団体	安佐南区健康長寿課、各地域学区　社協、医師会、歯科医師会、高齢社会をよくする女性の会・広島、県知事認定ケアマネマイスター、安佐南区　地域包括支援センター、広島医療生協、安佐南区内　公民館、社会福祉士、介護福祉士、民児協、医療ソーシャルワーカー、認知症地域支援推進員 ※ケアマネマイスターとは、広島県独自の制度として、現場の第一線で活躍されている介護支援専門員（ケアマネジャー）の中から特に優れた者を「ケアマネマイスター・広島」として県知事が認定する者です。「ケアマネマイスター・広島」には、ケアマネジャーのトップ・ランナーとしての姿を示して他のケアマネジャーの目標や励みになって行くと共に相談・指導や研修講師などの活動を通じてケアマネジャーの資質の向上を図り県民の介護サービスの質の向上に役立って行く。 ※認知症地域支援推進員とは、広島市各区の1カ所に配置され認知症疾患医療センター等と連携して認知症の症状に応じた介護や権利擁護等のサービスの提供をする。

№2

10. 活動してよかったこと（具体的なエピソードがあれば添えてください）
公民館活動での介護トークについては、会員の皆様には一度は自分の住む地域以外で発表して欲しいとお願いしていますがやはり色々と抵抗があり、当初、「介護トークは嫌だ」と言っておられた方が2,3ヵ月後に「次は誰が発表するのか？」と言われ、「自分が発表したいと」手を上げられました。この様な事は、予想もしていなかった事で積極的になられた方には感謝、感謝です。この事は周りの会員にも良き影響をもたらし、会への愛着も芽生え喜んでいます。会員の年齢も最高年齢者87歳、その方が一人での発表となれば30分、40分話すとなれば厳しく工夫が要ります。インタビュー形式であれば可能ではないかと…インタビューする方をマスコミ関係の方（介護の取材された方）に、お願いしこのイベントをマスコミを通じて我々の活動を地域へ伝えて頂き男性介護者を「4木の会」へと誘導して頂きたく考えています。また、マスコミについては、我々「4木の会」の広報担当としてお互いギブ＆テイクの関係でいたいと思っています。尚、発表者は、地域の皆様の前で話すと言う事は、若き時と違って発表の原稿の作成、発表時の多少の緊張感と発表後の心地よい充実感、皆様異口同音に「達成感」に喜んでいます。現役の介護者については会員さん少数ですのでアピールすべき努力をどの様にするか考慮中です。現在、2回目に当たる公民館より次回は、しっかりと地域の要望も入れ準備したいとの事で4項目程度提案して欲しい旨の言葉を頂いている。
11. 活動して困った（困っている）こと（具体的なエピソードがあれば添えてください）
我々「4木の会」の窓口は、行政（安佐南区健康長寿課）で随分お世話になっていますが公民館の活動の中でイベントのポスター、チラシ等の費用はすべて行政、公民館にて負担して頂いています。我々の窓口である健康長寿課予防係と高齢福祉課は背中合わせで当然業務の内容が関連しているにも関わらず意思の疎通が・・。民間の企業では、考えられないこと。縦割り業務で仕方ないことなのでしょうか。この事については、行政にその様な事例が出ればその都度申し出をするつもりです。会を開催していると色んな介護風景が見えます。どうにもならない相談がありますが、行政、地域包括支援センター、民生委員と関連する部署と話すのですが、何も手立てができず相談者に報告しますがそう言う案件について私は、無力感にさいなまれます。

12. これからやってみたいこと（活動や組織のこれからの方向性）
現在公民館活動のイベントまた、福祉関係からの介護等の要望があれば積極的にやって行こうと思っています。それが地域へ「認知症について」の啓蒙・啓発に繋がり我々男性介護者また、介護者の支援と協力に結び付くと考えています。また、会の方向性は、介護者を中心に、介護 OB、家族の認知症を心配している方の参加、をサイクルにて介護者の輪が広がるようやって行こうと考えています。その他の活動について、今回のシンポジュウム　ケアメン・コミュニティのマネジメントで参考になる発表があれば、大いに参考にして行くつもりです。現在、行政・安佐医師会より本年秋に安佐南区文化センターにて、認知症に関するイベントの開催を実施するとの事。我々「4 木の会」にこのイベント参加して欲しいとの申し出があります。個人的には、イベントには夢があり「4 木の会」が主催者で大きなイベントを開催したいと思っていますが。
13. その他
現在介護者の関する支援は、何もない状況で国は在宅介護を中心に移行してするようですが現在のまま 2025 年を迎えると介護者は、大変な状況になります。我々社会資源の「男性介護者のつどい」が行政、医師会そして介護者の円滑油になれば地域に役立てる事になれば…と思います。地域の包括支援センターの業務も地域の方々は、知っていない方が多く特に男性は、身近に接する事がなく家族の中で認知症等初めて罹って慌てふためいてしまう状況です。また、在宅医の存在も解らないと言う事は不幸ですし、まだまだ介護保険に対しても不備なことが多く苛立っています。国の福祉に対する政策について考えさせられます。

★お持ちのチラシやパンフレット、広報資料等をお送りください。資料集を作成したいと思います。

＜資料（2）＞

男性介護者　4木の会が行ったイベント紹介

平成24年から安佐南区内の公民館と区健康長寿課と共催し、男性の視点からの介護について紹介するとともに、男性介護者の会をPRしています。

佐東公民館　平成25年3月9日（土）　10:00～11:30

【内容】
男性介護者の方のおはなし

体験談

● ４年前から９０歳の母親を介護しておられるMさん。
今はディサービスや医療訪問などの介　護サービスを使って在宅介護をしている。
介護を始めた頃は歩けなかった状態だったが、入院、リハビリを経て自力でトイレに行けるほど回復。日々の介護の大変さや介護を誰が担うのか等、兄弟間での葛藤はあるが困難な時代に私たち兄弟を育ててくれた恩に報いるためにも頑張っていきたい。

● ８１歳の妻を介護して４年のMさん。
妻は小学校の同級生。徘徊、妄想などの症状はないが新しい記憶から徐々に薄れ、今では自分は２０～３０歳代と思っており、私の事を夫だと認識もはっきりしていない。
そのため排泄介助の時「助平！」と言って頬を思いっきり叩かれたりもした。
妻が認知症になって困ったことが多々ある。①トイレ介助　②終末期にどう向き合うか③成年後見人の設定：金融機関に認知症告知をしたため預金が凍結されたなど、介護に直面して色々な困難なことが起きる。そのためにも「知る」ことが重要。介護は突然にやってくるので…。自分も体調が良くないので、どちらが先にとの思いだが、何とか頑張っていきたい。

広島市城山北・城南地域包括センター
近年、親＋未婚の子、共働き書体の増加、男女がそれぞれ自分の親を介護するように役割の変化。また、核家族化や女性の社会進出で男性介護者が増加傾向にある。
しかし、男性は介護や生活家事の経験が乏しく、近隣との付き合いも薄いため孤立しがち。新しいライフサイクル、社会構造にあった介護の仕組みが求められている。

まとめ
はじめに地域包括センターから、近年男女の割合や社会構造の変化等により男性介護者が増加している。
しかし、男性は生活家事や介護の経験が乏しく孤立しがちで虐待などの問題を起こしている。地域包括としても社協などとも連携して相談・解決に当たれるよう対応していきたいとの講演があった。
次いで４木の会員２人から介護体験談を語られた。
共に介護を始めて４年目となり、介護サービス等を使い何とか頑張っているが、本人も高齢で体調の問題、認知症特有の記憶が無くなっていくことによりコミュニケーションが取れなくなっていくことの不安、日々の介護の難しさ等について語られた。
当日は多くの参加者があり、はじめて話を聞いて介護の大変さが分かった。他の人にも話してあげたい。今後の自分に活かしたい。多数の聴衆に驚いた。今後も続けて欲しい、などの感想が寄せられた。

URL：http://www.megaegg.ne.jp/~murasan/ibento1.html

古市公民館　平成25年4月14日（日）　10:00～12:00

【内容】
演題　男性介護について考える
講師　中国新聞社論説委員
　　木ノ元　陽子さん

記者として、介護について新聞に連載記事を執筆。取材を通して得られた男性介護の現状と問題点。これを踏まえて、男性が介護する視点での制度設計の見直しや男性介護問題の社会化等が必要になると、今後の課題について講演をしていただきました。

続いて、地域包括支援センターの役割や日々の活動において感じた介護者の現状と課題について講演をしていただきました。

最後に、木ノ元さんと４木の会の妻を介護しているMさんと母親を介護されていたMさんに介護の苦労や問題点、また、それらを解消するための工夫などについてインタビュー形式で答える形で体験談を発表していただきました。

まとめ
当日は４０名あまりの参加者があり、自分がやっている介護の参考になった。今日の内容を皆に知らせたい。今後もこのような講座に参加したい。たびたび開いて欲しい。このような話を全市に紹介して欲しい。公民館にこれなかった人は何十万人もいる。等の感想が寄せられました。

URL：http://www.megaegg.ne.jp/~murasan/ibento2.html

安公民館　平成25年9月29日（日）13:30～15:30

【内容】
演題　家族の介護を考える
　　男性介護者の体験談を通して
講師　広島県立広島大学
　　講師　手島　洋さん

「男性介護の課題と展望を考える」というテーマでこれまでの研究と実践に基づき、男性が介護の前面に出ざるを得なくなった背景や仕事との両立、男性ならではの介護の困難さをわかりやすく説明いただきました。
　また、働きながらできる介護システムの構築、そうして介護者とつながることで社会、システムの変容が期待できると「今後の展望についても講演をしていただきました。

広島高取北・安西地域包括支援センター
　地域包括支援センターの業務や活動内容をわかりやすく説明していただきました。

体験談
　４木の会員で７８歳の妻を１４年余り介護しておられるＨさんに、発症から現在までに、妻が行方不明になり警察に保護された出来事など、体験を基に発表していただきました。

まとめ
　高校生や大学院生など、幅広い年代の方の参加があり、活発な質疑が交わされました。

URL：http://www.megaegg.ne.jp/~murasan/ibento3.html

男性介護者　4木の会

男性介護者
4木の会

会の紹介

メンバー紹介

会員募集

例会の様子

イベント

会員ほっとサロン

介護情報

会員募集

● 介護に携わる男性達！！ ●

例会では、介護の苦労話や疑問、知識・知恵などを話し合っています。

会員の中には、20年近く妻の介護に携わり、知識や経験豊富な方もいらっしゃいます。

また、看取った後も会の継続に力を貸してくださる方もいらっしゃいます。

介護はゴールが見えません。しんどくなることも沢山あります。

4木の会は毎月第4木曜にご家族を介護している男性が語り合い、介護の先輩からアドバイスを得て心身をリフレッシュする場です。

介護の都合で遅れて参加や早退も可能です。是非一度お越しください。 ストレス解消ときっといい仲間に出会えます。

あなたの参加をお待ちしています。

【問合せ先】　安佐南区役所　健康長寿課　☎(082)831－4942

http://www.megaegg.ne.jp/~murasan/kaiinnbosyu.html

4. 認知症の人と家族の会がサポートするケアメンの集い 熊本県「ケアメンのつどい」の経験から

堀本　平

司会：戎さん、ありがとうございました。最後の報告をしていただきますのは、熊本県認知症の人と家族の会熊本支部の「ケアメンのつどい」の発起人であります、堀本平さんです。熊本県の他にもこうした男性に絞った交流会を開始する家族の会の府県支部が増えていると聞いています。それでは堀本さん、よろしくお願いいたします。

皆さん、こんにちは。熊本県から参加しました、堀本です。今、紹介がありました認知症の人と家族の会熊本県支部が開催しております「ケアメンのつどい」最初は「男性介護者のつどい」としていましたが、平成25年1月から名称を「ケアメンのつどい」と変えました。これについて事務局から示されました項目についてお話しいたます。

私自身、妻がアルツハイマー型認知症で4年前から要介護5に認定されています。デイサービスを利用しながら在宅で介護しております。今日参加するために、昨日からショートに1年ぶりに預けてきました。私自身、ケアメンの一人であります。

まず、つどいの概要ですけれども、始めたのは平成20年2月からです。毎月第2水曜日に県が設けました認知症コールセンターで開いております。この認知症コールセンターは、熊本市の繁華街のど真ん中で非常に交通の便がいいところです。ちょうど今年で3年になります。回数としては37回。参加人員は延べ492人です。認知症の家族の会がやっていますので、認知症を介護している男性の集まりです。

参加した人の介護対様別で見ますと、奥さんを介護している人が24人。このうち若年の方が7人。それと、お母さんを介護している人が14人。両親を介護している人が4人おられます。それから、既に看取られた方が4人です。

活動のきっかけは、認知症家族の会熊本県支部が、高齢期認知症のつどいと

若年期認知症のつどいを毎月開いていました。しかし、なかなか男性の参加が少なく、参加されても自分の思いを話されないのです。私もそうだったのですが、多くの女性の中では泣き言が言えないということで、平成23年12月ごろから何とか男性だけで集まれないかと考えました。そこで、今日一緒に参加している宇土みどりさんが、家族の会の世話人として活躍しておられ、認知症コールセンターの相談員としても経験豊富でしたので、宇土さんに相談しました。そして、チラシをつくって配ろうかということになりました。

しかし、「どこに配っていいか分からない。」「やみくもに配っても効果がない。」ということで、県支部の事務局で『絆』という広報誌を作っていましたので、それに掲載しようということになりました。絆は、毎月500部ぐらい発行して、家族の会の会員と市町村などに配っている資料です。これに、12月と1月に掲載してもらいました。そういうことで、ケアメンのつどいを2月から始めました。

最初、どれぐらいの方が集まられるかちょっと不安だったのであうが、11人参加していただいて、県の認知症対策推進課長と職員の方も参加されました。非常に内容のある第1回目のつどいができました。

最初、私たちは2カ月に1回ぐらいが精いっぱいではないかなと思っていましたが、参加された11人の方が全員「毎月やってくれ。」と希望されました。そこで、3月以降は毎月開催になりました。

第1回のつどいを開催した半月後に熊本市に隣接する合志市で、親子3人の心中事件がありました。これは、71歳の男性が認知症の奥さまと障害をもっておられる息子さんを道連れに心中されるという大変悲しい事件でした。2月1日のつどいにこの方が参加しておられたら、こういう事件は起きなかったのではないかと、翌月のつどいでみんなで話し合いました。やはり、こういった悲しい事件を防ぐためにもつどいというのは、重要な役割があるのだと思います。

それから、津止先生にも、故郷の鹿児島にお帰りになった際、2回ほどつどいに参加していただきました。平成24年7月と昨年の8月です。平成24年7月においでになったとき、初参加の方がおられました。この方は、66歳の独身でご自身が障害のある方です。お母さんを介護する中で、もういっぱいいっ

ぱいになられて、何回も包丁でお母さんを刺して死のうと思ったとはなされました。そういう思いをケアマネさんが知って、つどいを紹介されたようです。

参加したみんなが、「私達もみんなそういう思いをしたことがありますよ。」「一人じゃないですよ。」「これだけみんな同じ思いをしている人がいますから。」と話したら「ああ、自分一人じゃないんだ」「自分一人が大変な思いをしていると思ったら、ここで話を聞いてみると、自分の介護はまだ始まったばかりで、介護のうちに入らない。」とそこまで言って帰られました。それから、毎回つどいには参加されるようになりました。残念ながら昨年暮れにお母さんはお亡くなりになりました。

亡くなられる2カ月ぐらい前から入院されたのですが、それまで在宅でずっと見ておられました。お悔やみに行ったら「本当につどいに出てよかった」「あの機会がなかったら、自分は、優しい気持ちで母親を最後まで見送ることができなかった。」と話されました。初回においでになった時に、気になった事があったので、宇土さんと一緒にお宅を訪問しました。すると、出刃包丁で切り付けた跡が柱にいっぱいありました。

ほかにも80代の方は「主治医に楽に死ねる薬を処方してください。」と相談されていた方もおられます。奥さまの介護に行きづまり、心中しようと思われたそうです。認知症コールセンターに相談があり、つどいに参加されるようになりました。この方も後は落ち着いて介護されました。ほかにもたくさんの事例があります。

主なプロで、11時半開催にしています。大体午後2時に終わります。

世話人の司会で簡単な自己紹介を2～3分でやってもらっていますが、なかなか話が止まらない方がおられます。私も司会をしますが、どこで切ってもらったらいいかと迷うことが多々あります。それくらいやっぱり話したいという強い思いがあるのですね。

自己紹介は、30分程度で終わり、弁当を食べます。その後、初めて参加された方に少し時間を取って話していただきます。それをほかの参加者でいろいろフォローしていくというかたちを取っています。最近は17～18人参加されることが多くなり、認知症コールセンターが満杯状態です。後で問題点でも挙げますが、場所の検討が必要になったと思っています。一人の人が長く話した

ら、ほかの人が話せなくなるから、それぞれの介護対様別に、若年の方、親を介護している方、80歳以上の高齢の方の3班に分けて自由に話してもらっています。

女性世話人が「男性がこんなにしゃべられるのは初めて聞きました。」言われるくらいにぎやかなつどいになってきました。

会費は、弁当代500円です。今まで3年間継続してきてよかったなと思うのは、つどいを通じて非常に参加者の輪が広がっています。介護をしていると、なかなか酒の席に出席できないということで、若年の人が中心になって、飲み会を開いたり、高齢介護者の方が4～5人集まって弁当を食べたりしています。

それから、認知症コールセンターに、週に1回5～6人集まって弁当を食べながらの「ミニつどい」を開くなど、月1回のつどいを中心にいろいろなかたちの広がりを見せています。夜になると寂しいということでお互いに電話連絡もしています。

今後の課題は、男性は一歩踏み出すのが難しいのです。デイサービスの関係もありますが、水曜日は出て来られないとか、お誘いしても一歩踏み出せないというのが問題点です。

熊本市内1カ所で3年間続けてきておりますので、中には阿蘇から、車で2時間かけて毎回おいでになる方もいます。

JRを使って1時間かけておいでになる方もおられるし、各地域からの参加がありますから、各地域で何とかつどいを立ち上げられないかなという思いでいます。参加される方の中に、地域の核になっていただく方が、何人かおられますので、そういう方たちと話して、小規模でもいいから、集まりましょうと進めているところです。

それと、月1回ではなかなか参加できないので複数回開くことと、開催場所の検討をしています。今空き家対策が、各行政機関で進められておりますので、空き家を利用してつどいを開けないかと考えています。

ケアメンのつどいの中で、一言メモしてもらったつぶやきを3～4ページにまとめて「もっこす談義」として、毎月50部ぐらい男性介護ネットの会員さんとつどいに参加される方に配っております。本日宇土さんが30部ぐらい、創刊号だけもってきていますので、ご希望の方は申し出ていただきたいと思い

ます。

　どうも早口で分かりにくかったと思いますけれども、ご静聴ありがとうございました。

資料

(1) プロフィールシート

(2) 第１回「男性介護者のつどい」に参加しませんか？

＜資料（1）＞

2015年３月７日（土）男性介護シンポジウム

プロフィールシート

№1　　（記入者：堀本平）

1.団体名	認知症の人と家族の会熊本県支部
2.代表者	世話人代表　内田　妙子
3.所在地	熊本市中央区上通町3-15　ステラ上通ビル3階
4.連絡先	電話　096-223-5164
	FAX　096-223-5164
	E-mail　nintisho@oasis.ocn.ne.jp
5.設立・活動時期 （貴会のチラシパンフ資料等を添付してください。）	①平成24年2月発足 ②設立のきっかけ・動機 家族の会熊本県支部では、16年前に発足以来、「高齢期のつどい」と「若年期のつどい」を毎月各1回開催していたが、男性介護者の参加が少なく、参加してもあまり思いを話されなかった。そこで、「男性だけのつどい」の開催を検討し、平成23年12月から準備を進め、翌24年2月に第1回を開催した。 ③貴会のアピールポイントやスローガン、キャッチコピーなど つどいを通じて、参加者相互の連携を深め、介護負担の軽減を図る。
6.会員数 （男性介護者の事業に参加する人について、大凡で結構です）	＊約（　50　）人、（内、夫　26　人、息子　20　人） ＊内訳：①介護当事者（　42　）人、②介護者OB（　4　）人 ③支援者・専門職（　4　）人、④その他（　　）人 ＊専門職種［　　］
7.活動内容 （チラシやパンフなどがあれば添付してください）	例会の開催日や大まかな内容（プログラム） 毎月第2水曜日　　午前11時30分～午後2時 場所　熊本県認知症コールセンター 世話人の司会で、参加者全員の自己紹介の後、弁当を食べて、午後は初参加者に少し時間をかけて話してもらい、参加者が自分の介護体験をもとにアドバイスする。テーマ―を設けて、全員で討議することもある。参加者が多いときは、介護態様別にグル―プ分けすることもある。
8.活動資金	会　費［　有　　］（有の場合　弁当代　500　円） 助成金［　無　　］（有の場合　　円） その他［　無　　］（有の場合　　円）

9. 協力・連携団体	男性介護ネット　熊本　　会員　31 人

№ 2

10. 活動してよかったこと（具体的なエピソードがあれば添えてください）
つどい参加者相互の連携が深まったこと。 ○　若年性認知症の妻を介護している人たちが、妻のショートステイの日を調整して、夜飲み会を開いている。 ○　妻の入院でひとり暮らしをしている高齢者の家に、4 ～ 5 人集まって定期的に昼食会を開いている。 ○　認知症コールセンターに随時集まって、弁当を食べながらミニつどいを開いている。 ○　相互に電話連絡を取り合っている。 など、月 1 回のつどいを中心に、ケアメン同士のつながりの場が広がりつつある。
11. 活動して困った（困っている）こと（具体的なエピソードがあれば添えてください）
10. これからやってみたいこと（活動や組織のこれからの方向性）
○　各地域でのつどいの開催 熊本市内のみで開催しているので、車で 2 時間かけて参加される方がおられるなど県内各地からの参加者があるので、各地域での開催を検討している。 ○　月に複数回の開催と場所の確保 毎月 17 ～ 8 人の参加者があり、コールセンターでの開催が困難になってきているので、月に複数回開催の検討と開催場所の確保を進めている。
12. その他
会報の発行　（男性介護ネット　熊本） ケアメンのつぶやきをまとめた「ケアメン　もっこす談議」を昨年 10 月創刊し、毎月 50 部を男性介護ネット会員やつどい参加者に配付している。

★お持ちのチラシやパンフレット、広報資料等をお送りください。資料集を作成したいと思います。

＜資料（2）＞

◆2011 年 12 月 25 日発行「ぽーれぽーれ」　通巻 377 号　　1984 年 7 月 17 日　（第三種郵便物認可）

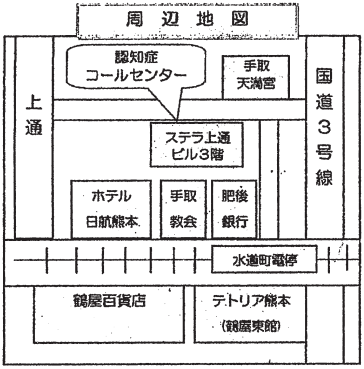
第1回
「男性介護者のつどい」に参加しませんか？

奥様やご両親などを介護されている男性介護者の皆さん
●介護や家事で困ったことはありませんか
●一人で悩んでいませんか
●他人には話しにくい苦労はありませんか
こうした介護の悩みや苦労を、男性介護者同士で話し合いましょう。
熊本で初めての男性だけの「つどい」です。ぜひご参加ください。

認知症の人と家族の会熊本県支部では、第１回「男性介護者のつどい」を次の通り開催します。
多くの男性介護者の皆さんのご参加をお待ちしています。

日　時　　平成２４年　２月　１日（水）
　　午前１１時３０分～午後２時（受付午前１１時～）
　　昼食は弁当をご準備します。
　　弁当代は当日お支払いください
会　場　　熊本県認知症コールセンター
　　熊本市上通町３－１５　ステラ上通ビル　３階
　　電話　０９６－３５５－１７５５
参加費（昼食弁当代）　５００円程度　（弁当代は当日お支払いください）

参加を希望される方は、１月２７日（金）までに、家族の会熊本県支部事務局（電話：０９６－２２３－０８２５）へお電話にてお申し込みください。
昼食をご準備するため、事前のお申し込みにご協力をお願いします。



21

4

第１回「男性介護者のつどい」を終えて

世話人　堀　本　　平

認知症の人と家族の会　熊本県支部の、第１回「男性介護者のつどい」が、２月１日　熊本県認知症コールセンターで開催されました。

参加者は

男性介護者　１１人　（妻を介護中の人　９人　母親を介護中の人　１人
妻を介護して看取った人　１人）

熊本県認知症対策・地域ケア推進課長　ほか職員　１人

熊本日日新聞社　記者　１人

事務局　１人　　サポーターとして女性世話人　３人

の合計１８人でした。

午前１１時３０分に開会し、事務局員の司会で、世話人の挨拶に続き、熊本県認知症対策・地域ケア推進課長から、熊本県の認知症対策の取り組み状況について説明がありました。

その後、参加者の自己紹介が行われ、弁当を食べながらの懇談になりました。

午後は、介護者一人ひとりが抱えている、介護の問題点や悩みなどが発表されました。

○　炊事や洗濯など家事の負担が重い。
○　介護するようになって、友達との交流がなくなり孤独になった。
○　深夜のトイレ介助で睡眠不足になる。
○　介護のため、早期退職し経済的な不安がある。
○　排泄失敗の処理が大変である。
○　昼は仕事、夜は介護で気を抜く暇がない。

など、男性介護者ならではの悩みなどが聞かれました。こうした、男性介護者に対する、行政の支援を求める声もありました。

介護者の悩みなどについては、同じ体験をした介護者からのアドバイスなどもありました。初めは皆さん少し硬い表情をしておられましたが、会話が進むにつれて、打ち解けて再開を約束される姿も見られました。

午後２時に終了しましたが、参加された男性介護者の皆さんから、毎月つどいを開いてほしいとの要望がありました。県支部では、検討の上３月以降も毎月開催することにしました。

男性介護者のつどい　定期開催決定！

認知症の人と家族の会熊本県支部では、第２回「男性介護者のつどい」を次の通り開催します。多くの男性介護者の皆さんのご参加をお待ちしています。

日　時　　平成２４年　３月　１４日（水）
　　午前１１時３０分～午後２時（受付午前１１時～）
　　昼食は弁当をご準備します。弁当代は当日お支払いください。
会　場　　熊本県認知症コールセンター
　　熊本市上通町３－１５　ステラ上通ビル　３階
　　電話　０９６－３５５－１７５５
参加費（昼食弁当代）　５００円程度　（弁当代は当日お支払いください）
申し込み　３月１０日（土）までに、家族の会熊本県支部事務局
　　（電話：０９６－２２３－０８２５）へお電話にてお申し込みください。

熊本日日新聞　平成24年2月2日　木曜日

男性も介護語り合う

弱音吐けず孤立、家事に不慣れ…

認知症の人と家族の会県支部は1日、熊本市上通町の県認知症コールセンターで、家族介護に関わる男性だけが参加する「男性介護者のつどい」を初めて開いた。認知症の妻や母を介護する男性11人が参加し、互いの悩みを語り合った。

妻や母親を介護する中での苦労や悩みを語り合う「男性介護者のつどい」の参加者＝熊本市

認知症の人と家族の会　熊本市で初のつどい

高齢者同士の「老老介護」が広がるなど社会的状況が変化する中、介護に男性が関わる機会が増えている。しかし男性は家事に不慣れだったり、弱音を吐けずに孤立しがちとなったりする場合も多く、男性介護者への支援が全国的に注目されている。県認知症対策・地域ケア推進課によると、担当する限り、県内で男性介護者だけの集まりは今回が初めて、という。

つどいでは参加者同士で語り合い、「女性である母親を自ら介護することに抵抗を感じる」（60歳）、「炊事は大変。孤独を感じる」（81歳）と日々の思いを吐露した。

同県支部世話人で、妻を在宅介護する坂本平さん(72)は「男性は悩みを抱え込みがち。今後も定期的につどいを開き、互いに支え合いたい」と話している。

県認知症コールセンター☎096（355）1755。

（小多崇）

平成 26 年　月　日

「ケアメンのつどい」について

一般のつどいには、男性介護者の参加が少なく、参加されても、なかなか思いを話されないので、「男性だけで集まってみよう。」と言うことで、平成 24 年 2 月 1 日に第一回のつどいを開催しました。

今回で　　回目の開催となり、参加者は、延べ　　人となりました。

つどいの進め方

お 1 人 2 ～ 3 分で簡単に自己紹介をしてもらいます。昼食後初参加の方に少し時間をかけてお話いただき、皆さんで討議したいと思います。

自己紹介の要領

支障のない範囲で

お住まい、お名前、年齢、どなたを介護しておられるのか（年齢、病名、介護度など）

どの様な介護をしておられるか（在宅、デイサービス、施設入所など）

介護で特にお困りのこと。　など

ケアメンについて

育児をする男性が「イクメン」なら、介護をする男性は「ケアメン」と呼ぼう。

京都の立命館大学に事務局をおく「男性介護者と支援者の全国ネットワーク」略称「男性介護ネット」が提唱し、全国に広がりつつある言葉です。

Ⅱ．シンポジウムでの「質疑応答」に際して
はじめに

コーディネーター　津止　正敏

皆さん、再開いたします。

「ケアメン・コミュニティのマネジメント」と題する今日のシンポジウムですが、その開催動機というのは何より男性介護者の会や集いというケアメングループが随分増えてきたということにあります。

私たちが2009年3月に、男性介護者と支援者の全国ネットワークを結成して活動を始めた頃は、東京の「オヤジの会」、長野の「シルバーバックの会」、そして京都の私どもの男性介護研究会、そのぐらいしか交流している団体はなかったのですが、その後活動を続けていくうちにいろいろなところとお付き合いが広がりました。急激に、地域に男性介護者の会や集いが広がってきました。主催者も、ものすごく多彩です。今日、ご登壇いただいている方々も、それぞれ特徴ある主催者の方にお声掛けをさせていただきました。支援者でも井口さんや井出さんのように、社会福祉協議会や地域包括支援センター、あるいは高齢者介護施設が会をサポートしているグループもたくさんあります。戎さんや堀本さんのように、当事者でありながら会を運営しているところもたくさんあります。支援者もたくさんいるし、参加者もいろいろな方がいらっしゃって、息子もいれば夫もいるし、介護のOBもいればもちろん現役もいる。おじやおばを介護する甥という方もたくさんいらっしゃいます。

参加者も主催者の系統も非常に大きく異なる環境での取り組みが進む中で、どういう運営の工夫が必要なのかというテーマがあるんですね。会はたくさんできたけれども「回を重ねるたびに参加者が少なくなって、スタッフは困っているんです」という話もあれば「いや、これ以上、会員が増えたら、マネジメントが大変です。せっかく集まってもらったのに会員同士の話ができない」と困っている方もいらっしゃいます。こうした悩ましい課題にどのように対処していったらいいのだろうかを思いながら、今日、発表していただいたわけです。

私たちの情報不足もあるかもしれませんけれども、皆さん方がご苦労してい

る内容をいろいろな形で、いろいろな角度で切り取ってみたら、日ごろの活動の参考になるのではないかと思って、今日のような形態を持ったのですけれども、幸い、時間の余裕もあるので、あと何人かの方々からもお話を頂きたい。既に私の手元には20人以上の方からの質問票が届いていますが、これひとつひとつに丁寧に答えていくには時間がありません。ですから、全体読み上げてご紹介をしながら、4人の発題者の皆さんにはお答えできる範囲で結構ですので答えていただいて、そのあと答えることができなかったことについては、私も含めてになりましょうが、フロアの皆さま方のご体験を基にして教えていただきたいと思っておりますので、よろしくご協力を頂きたいと思います。

私の時計では3時半ですので、ここを5時までということですけれども、会場の後片付けもあるので、4時45分を目途に終わっていきたいと思います。それでも1時間15分と時間はたっぷりあるので、意見交換を深めて、今日のこのシンポジウムを成功裏のうちに終わっていきたいと思います。最後までご協力のほど、よろしくお願いしたいと思います。

1. 発題者との質疑応答（質問票をもとに）

(1) 発題者への質問内容の紹介

津止（以下、「司会」）：それでは、フロアの皆さんから質問票によって頂いた4人の発題者へのご質問をご紹介したいと思います。相当な文量ですのでこれを読むだけでも、本当に30分以上かかるかもしれません。皆さん、心して聞いてください。この質問は、順番に紹介しますけれども、まずは井口さんと井出さんへの質問です。「伊那市が大好きです。交通が不便なんだろうけれども、皆さん、車で集まりに来られるのでしょうか。だんだん運転もできなくなると思いますけれども、公共交通で集まられていますか」という、どんなふうに会にアクセスしているのかという質問です。この質問者の地元の美濃市では、来年度に市の交通担当者を呼んで介護タクシーの勉強会をすることになったそうですが、参加者はどんなふうにして来られているのでしょうかという質問です。「介護カフェの提案もあったんですけれども、具体化していますか。東京の学芸大学の駅の近くの紹介もしていますけれども、介護家族が多くて、バーが介護バーになっているという、そのような状況あるということで、ニーズがあるのではないか」というご意見も頂きました。

この質問も井口さんです。「男性介護者の料理教室の具体的内容、日数、人度、頻度、場所、参加の呼び掛け、参加者数、先生は誰か、費用はどんなものか」ということです。また、「そもそも、医療生活協同組合とはどんな機何ですか」という質問もありました。私も、医療生協の本部（日本医療福祉生活協同組合連合会）の理事をやっているので、本来、私が答えなければいけないのかもしれませんけれども、井口さんにお願いしたいと思います。「OBが出向いて、集いに来れない人と話をしにいくとおっしゃったけれども、個人情報の壁はないのでしょうか。どんなふうにして出向いていく人を把握するのでしょうか」というご意見もありました。

次は堀本さんへの質問です。「なかなかしゃべられない男にどうしたらいいのでしょうね」という、みなさん方も同じ悩みや課題を抱えているのかもしれませんけれども、みんなで考えたいですね、ということでありました。それから、井口さんには「世話人の持ち回り体制をつくったきっかけは何だったのだ

ろうか。世話人会議はやっているのでしょうか」という質問もありました。

「息子介護者は、行政や専門職との関係で一番問題になっていることはどんなことか、改善してほしいことはどんなことだろう」という行政専門職との関係ですが、井出さんへの質問です。堀本さんへは、「会の運営体制や行政のサポートはあるのだろうか」という質問がきております。「小さな地域別の集いについては、どなたかが集約して会の開催にこぎ着けているのだろうか、あるいは地元任せなのだろうか」という、そんなご質問でありました。

それから、井口さんに、「13 時半から 15 時までの 1 時間 30 分のイベントが多いんだけれども、参加者お互いの話や交流は十分できていますか」という質問です。井出さんに、「介護者の担当ケアマネージャーが、全員、関わっているわけではないようなので、ケアマネージャー同士で情報交換やっているのでしょうか」という質問もありました。井口さんには「介護者宅を訪問するのは有効だと思いますけれども、男性介護者を訪ねる方法には、いろいろ情報保護のハードルが高いのではないか、どんなふうにして解決の見通しを持っているのでしょうか」ということです。井出さんへ、「印刷通信費はどんなふうにしてまかなっていますか」「縁側あさひに関してですけれども、空き家を利用した地域の運営に関しては、国や県から補助金が出ているのでしょうか」「会の活動をデイサービス、ショートステイということで開催されているために、介護者が出られないということですけれども、決まった日に、決まった場所での開催は難しいですか。それは、なぜですか。介護者も、毎月、決まった場所があった方が出やすいのではないですか」という幾つもの質問もありました。「御代田町では、不定期に開催しているけれども、どうなのでしょうか。『4 木（よんもく）の会』のような、あるいは福岡の『金 3 介護』とか、定期的な方が出やすいのではないか」という質問でした。

これも井出さんへの質問です。「送迎の問題が、ケアマネの皆さんが必要なお父さんたちを拾っていくんです。これは非常にいいことで、あったら素晴らしいなというご意見でありますけれども、そういう際の事故対策です。多分、ケアマネさんが所属している社協の車を使っていくんでしょうけれども、事故のときの心配だけれども、どうなんだ」という質問です。また井出さんです。アルコールを飲んでいると、ビールを飲んだり、日本酒を飲んでいると思いま

す。私が行ったときも、皆さん、盛んにやっていらっしゃいましたけれども、「その費用負担はどうしていますか」という質問です。「アルコールを飲むことのメリット・デメリットはありますか。あるとすれば、どんなことですか。どんなふうに考えていますか」。

それから、戎さんと堀本さんに、活動の中で代表の方、つまり戎さんや堀本さんたち、あるいは何人かのリーダーの方たちは、「介護しながらの活動ということで、ご負担が重くなってしまうことが心配だけれども大丈夫ですか、どんな工夫がありますか」ということでした。それから、「介護に伴う生活の維持がどうなのだろうか。参加されている方々は、生活に心配がない方々が参加しているのではないか」という、生活が非常に困難な方々が参加されているのかなというご心配です。それは、どう思いますでしょうか。それから、堀本さんに、「交流会の開催の運営委員会、チラシ、会場費、先ほどの男性介護者つぶやきみたいな、その支出費用はどこで捻出しているのでしょうか」という質問です。行政とのつながりが非常に大きいコールセンターも含めてですけれども、どんなふうにしてつくったのだろうかというご意見です。これは最後の質問ですけれども、堀本さんへのものです。感想かもしれません。「現在、要介護2の妻69歳、私は77歳です。精神病院に入院で、約半年になります。病院側から、そろそろ自宅で介護するように言われています。大変ですよね。そろそろ自宅で引き取ってほしいと言われています。帰宅しても、おそらくみられそうもなくて困っています。私を誰か認識できているような状態ではなくなってきたという、妻が自分のことを認識できなくなってきている」そうです。「熊本県での取り組みはかなり進んでいるように思えますけれども、認知症コールセンターや認知症対策推進課などとの連携があるとのこと、堀本さんの話が大変参考になって、事件のことなんかも身につまされる思いです」と、こういうご感想を頂いております。

こういう質問を頂いております。ご回答できるような状況ですか、整理が必要ですか、少し整理が必要ですか。もし整理が必要であれば、各地の状況を2～3、聞きながら考えていただきましょうか。

(2) 男はしゃべらない！？

堀本：堀本です。幾つか、ご質問にお答えができると思います。

まず一つ目の、しゃべらない男にどうしてしゃべらせるかというお話ですけれども、いったん集いに参加されると、しゃべりすぎるくらいしゃべられます。先ほども言いましたように、自己紹介で「2～3分でお願いします」と言うのに、延々としゃべられる方がおられます。グループ分けして話したら、切りなく話されます。だから、まず参加していただくことが一番大事ではないかと思っております。

それから、二つ目の行政のサポートとか地域での開催をどうするのかですけれども、先ほども説明しましたように、熊本県が認知症コールセンターを設置してくれて、家族の会に委託しています。そういう中でいろいろな活動をやっております。地域の開催については、今、それぞれの地域で核になっていただく参加者がおられるので、そういう方が地域の役場とか包括とかに相談しながら、どういう形でやっていくかを、今、進めているところです。それに私たちが関わっていければ、また出掛けていってやりたいと思っております。ただ、行政とか地域包括に私たちも幾つかお願いするのですけれども、構え過ぎられるんです。計画を立てて、人を集めて、何かを話さなければいけないという形で、なかなか立ち上げが難しいです。そうではなくて、集いは家族の人が集まって、自由に話せる場を提供してもらったほうがいいのではないかと思うのですけれども、それぞれの立場で、なかなか難しく考えられるようです。

それから、費用の問題が出ましたけれども、認知症コールセンターは、県からの委託事業で運営しています。いろいろな資料をつくる際の予算がありますので、そういうものを活用できる範囲内で活用しながらやっております。

最後にご奥さまの退院の問題ですが、これは私たちも、相談を受けた内容で幾つも抱えております。今、病院が早期退院を進めているようで、「家に引き取りたいけれども、なかなか在宅介護は難しい、どうすればいいんだろうか。」という相談が、集いの中でもありますし、認知症コールセンターの相談の中にもたくさんあります。こういう問題は、全国的にあるのではないかと思っています。だから、なかなか難しいです。自分が在宅介護しているから、こういうふうにやればいいですよとお話しするわけにはいきません。それぞれのご家庭

の事情がありますので。また、施設利用も、ちゃんと受け入れてくれる施設がうまくあればいいんですけれども、幾つかの施設をご紹介して、見学に行ってくださいということで話をしています。ごく最近、女性の方から相談を受けたのは、「今入院中の主人が、3月いっぱいで退院を求められています。施設を利用したいけれども、在宅しながら泊まりもできるようにしたい。」ということでした。その方の近くの小規模多機能のいくつかをご紹介して「見学して、話してみてください」と言いました。すると、ある施設の方がすごくいい方で、「私のほうから病院に何回か出掛けていって、ご主人とのつながりを付けて、3月に退院された後、もし利用できればうちのほうで受けます。」と言っていただき、ほっとされた方もおられます。これはなかなか難しい問題ですけれども、今からたくさん出てくる問題だと思います。

司会：はい、ありがとうございました。後で思い出したら、またご発言ください。

ほかの方はどうですか、大丈夫ですか、発言されますか。では、どうぞ、井出さんのほうからお願いします。

(3) 息子介護者の仕事のこと

井出：たくさんのご質問、ありがとうございました。息子介護者への働き掛けと夫介護者との違いはというご質問があったんですけれども、ご主人だと、大概、お仕事をお辞めになっているというか、おうちにいらっしゃる方が多いです。それから、息子介護の場合は、まだお仕事をしながらの介護というところで違っています。今、私たちがやっているのは、平日に男性介護者会をやっているのですけれども、お仕事をされている方が集えるかとなると、日曜日とか土曜日とかになるのかなと思います。私たちが、日曜日に集えるように環境設定をしたらいいのかなと思います。まず、そこが違いなので、お仕事をしながら介護できるように支えたいなと、うちのケアマネは思っています。突然、辞めることのないように、お仕事をしながら上手に在宅介護ができるように、半分はショートステイを利用するなど、しかし介護1だと活発に動くんですけれども、限度額がないため、あまりショートも使えなくて、どうしようと思って

いると思うんです。そういうところも一緒に寄り添って考えていけたら、いいなと思っています。あとは、世代間交流というか、今、なんとなく分けて考えているんですけれども、人生の先輩として介護に関わった方との交流をして「こんなふうに頑張っている人もいるんだな」と、お互いをねぎらえるようにしてあげたいなと思っています。答えになっているか、ちょっと心配ですが。

(4) 会の運営に係る費用

井出：それから、印刷通信費は、私のパソコンで打って、コピーしています。社協の紙と、社協のパソコンを使っています。地域の縁側あさひの助成金ですが、まちの助成金を申請したりしています。あとは、どこかの財団の助成金を使おうと思って、係長が一生懸命、文書を書いたのですが、まだ地域の縁側活動を理解されていない財団さんだったりしたため、認めてもらえなかったみたいです。なので「地域の縁側って、こういうものだよ」というのを理解していただけるとありがたいかなと思います。

そんなふうに、ちょっと四苦八苦しています。上司である事務局長に言わせると、どうも社協も福祉活動のための貯金が少しはあるそうです。そういうところから取り崩して、電気代とかを払っているみたいです。なので「場所代だけ、お気持ちでお願いします」といって、郵便ポストのような貯金箱が玄関先に置いてあって「ありがとう」と言って50円ということでやっています。資料に書いてある50円というのは、それなんですけれども、お気持ちだけということで頂いて活動しています。

男性介護者のための地域の縁側ではないんですよね。管理者も地域の方が管理していただけるように、こちら側がコーディネートして、いつも管理人さんみたいに鍵を閉めたりしてくれるおばさんがいるんです。その人たちが、自分たちの縁側を守るために活動していて、そこに残っていた着物などを使って、縫い物をして、何かの講演会のときに売って、それを活動費にして、地域の縁側あさひでというふうにしてくれています。

(5) 参加者の送迎のこと

井出：送迎のときの事故対策ですよね。ご質問ありがとうございます。考えて

いなかったです（笑）。まずは、集まってもらおうというところしか頭にありませんでした。社協にはボランティア保険というのがあるんですけれども「ああ、それをかけてもいいんだ」と、今、思いました。気付いたところで、どうもありがとうございました。アルコールとか食事の部分は、皆さんが食べるものなので、シェアして、出してもらっています。当然、ケアマネージャーも自分のお財布から出します。なので、好きなものをたくさん食べます。
ケアマネーじゃー０同士での情報交換ですけれども、おかげさまで、うちのケアマネ同士で、その日はスケジュールを空けて、みんなで関わっています。今、社協のケアマネは６人いますが、入れ替わり立ち替わりはあるんですけれども、どうしても、その日、退院という人がいたり、緊急性があるときは抜けてしまいますけれども、必ず顔は出してそのときは参加しています。でも、私たち以外の事業所のケアマネに来てもらいたいので、このチラシはいろいろなところ、たとえば地域ケア会議などで出しています。地域ケア会議は民生委員さんとかいろいろな人も来るので、みんなに「この日やるので、どなたか気付いた人が連れてきてください。一緒に参加しましょう」と言って、活動しています。以上です。

司会：アルコールの効用というか、お酒を飲んで口がなめらかになって交流が進むという側面があるかもしれませんけれども、「突然、殴り合いが始まったとか、そういうメリットはないですか」という質問がありますが、どうですか。

（6）集いでの食事会やアルコールは？

井出：分かり合える者同士の集まりなのでうれしくてアルコールが過ぎてしまうので、私がふざけて「そろそろ、やめませんか♪」とか言って、歌を歌ったりしています。そうすると、なんとなく控えてくれるので「私、もう注文しません」とか「お酒を付けないでください」とかいって、そんなふうに軽く笑顔になるような言い方でストップします。

司会：お昼ですからね、そんなに度が過ぎるということはないかもしれませんが、和やかな雰囲気でしたね。では、井口さん、どうですか。

井口：お料理のところなんですけれども、しっかりつくっているのは2回の忘年会なんです。1回目は介護職というところで、栄養士さんが「こんなものはどうかしら」と言って、ミキサーとかで簡単にできるものをご紹介をしました。あとの2回は、忘年会で、1回目は先ほども申し上げたように、野菜たっぷりのお鍋を、一緒に関わってくれている男性のケアマネさんが考案して、皆さんに教えてくださいました。野菜を切ったりされるのも、すごく手際もいいし、繊細、上手ですし、喜んでしてくださいます。今年の忘年会は、地域包括の方と一緒に手巻き寿司を考えました。野菜を切ったり、卵焼きを焼いてくださったり、おすましをつくってくださったり、全部、男性の方たちがやってくださって、楽しくできました。ほかに「いつもの会でやりたいことはないですか？」と言うと、必ず「お料理をやってください」と言う会員の方がいらっしゃいます。忘年会以外にまだやったことはないんですけれども、そういうことでやろうねと決まれば「次の次の会では、やりましょう」というような感じで計画が立っていくと思います。

(7) 支援者のネットワークのこと

井口：世話人の人選ですけれども、自分たちの法人のケアマネージャーに誰か連れてきながら「参加してみませんか」とか、ケアマネージャーさんたちが「こういう会があるから、参加して、どういうものなのか知っておきませんか」とか、先ほど井出さんがおっしゃっていたように、地域のケアマネージャー会議のときに「こういう会議がありますので、ケアマネージャーさんたち、どうかご参加ください」というお声掛けもしております。また、法人の施設の相談員とかにも声を掛けたりして、時間が合えば出ていただくというふうな形で進めております。ただ、行政ですけれども、私たちの会では伊那市と南箕輪の包括の方に参加していただいて、ここも行政で、いつも同じ方ではなくて、持ち回りで、順番でおこしいただいているという感じです。一緒に参加していただいている中から、行政の方たちが感じていただいたものや、利用者の意見の中からくみ取っていただけたものを行政の解決に結び付けていただくという感じで、行政の方が積極的にそこの会を運営しているわけではなく、私たちが積極的にしているのではなくて、会員さんと一緒に立てていく感じのものですので、

そんな感じで気付いていただくという感じになっております。

13時30分から15時のイベントも多いんです。イベントで終わってしまう会もありますけれども、その中には、一人一言コーナーは必ず設けており、お花見であったら今までのお花見の感想や今回の感想を聞いたり、ほかのときでも「勉強会が30分で、あとの60分はお話をしましょう」というふうになっています。でも、あまり変化がなくて、前の月も次の月も同じことをお話になっていかれる方もいらっしゃるんですけれども、話すことが大事なので、一人一言は必ずしゃべっていただいております。来る方も、強制ではなくて、都合が付いたら来るという感じなので、10人近くおみえになることもあれば、4～5人しか来ないときもございますので、そのときによって話す時間も変えながら進めております。

(8) 会や集いに「来ない人」への対応

井口：それから、先ほどの、新しい案、来なければ行ってみようというスタイルですが、そこはまだ未開発の部分です。先ほど申し上げたとおり、私の家が介護状態になりまして、嫁ぎ先の父親が母を看取ったのですが、看取った後の落胆というのですか、どうやったら悲しみから立ち直れるだろうという状態でした。でも、もうOBになってしまったのですが、男性介護者の会に出て行くという感じでもないので、OBの方たちで共感できる方がいらっしゃったらぜひお話をと思って、ちょっとお声掛けしました。そんなお話をしたら「ぜひ、お話を聞きましょうよ」ということになって、来ていただければ良かったんですけれども、父を連れてちょっとお話に行って来ました。新しいお友だちづくりをしたという経過になっております。それも良かったかなと少し思いましたので、どう進めていくか、できるのかどうかはだ未定ではありますけれども、そんな活動もできるのかなという、そんな甘い甘い発表でございます。

(9)「医療生協」って？

井口：それから、医療生協とはというところですけれども。出資金を出して、組合員さんになっていただいて、その出資金で地域に向けて健康や医療の活動を行っています。また組合員活動している地域ばかりではなく、病院をつくっ

たり、介護施設をつくったり、これも多くの出資金でまかなっています。もちろん、会員さんでなくても病院には来ていただけるのですが、会員さんのために役立とうというものです。病院に来る前の健康づくりをしようということで、地域に向かって健康づくりをしたり、地域のために役立つ組合員活動であります。全国組織は、「日本医療福祉生活協同組合連合会」といいますが、長野県にも幾つかございます。そんなところです。

（10）会や集いへのアクセス―送迎の必要性―

井口：交通の質問もありました。今のところは車で来られる方、あとは近くなのでといって歩いてこられる方があります。以前は「通り道なので」といって、私たち事務局が乗せてきた方もお一人ありました。先ほどのお話のように、確かに高齢化になってしまったときに、車を運転されなくなってしまった方をどうするかというところは、皆さんのご意見で気が付いた次第であります。これから考えていきたいと思っております。ありがとうございました。

司会：はい、ありがとうございました。交通の問題は、御代田町では最初から送迎ですよね。だからこそ、アルコールが入れるんだろうと思うんですけれども。なぜ、最初から送迎が始まったのですか。

井出：一番最初は運転できる人に来てもらう、1回目のときはそんなふうに活動したんですけれども。多分「泡の出るものが飲みたいな」と言った時点ではそうだったので、その気持ちを引き出すようにして「じゃあ、送迎しなくちゃ」という自然の流れなんですけれども。

司会：はい、ありがとうございました。それでは、戎さん、お願いします。

（11）行政など援助機関との関係

戎：失礼します。先ほど、行政など専門職との関わりというご質問だったと思うんですけれども。私、基本的に、行政とはあまりくっつかないように、離れずというところにポジションを置いております。行政とくっついていますと、

いろいろなしがらみがございますので、そういったところでいくらか距離を置いて、今、会を運営しているような状況でございます。先ほど申し上げましたように、公民館活動をしていますと、チラシとかポスターの費用の捻出が一番困るんですけれども、そういったところは行政と公民館のサイドでやってもらっているような現況です。それは、そんな立派なポスターではございません。自治会がつくるような奇麗なポスターではないです。1回のイベントで、ポスターが100枚近く、チラシが400枚近くです。配布先は、医師会とか、歯科医師会とか、商業施設、スーパーなどです。それから、調剤薬局、JR、公共交通機関です。駅舎、待合室などに配布して、最終的には、後々「ああ、あそこにすれば良かったな」「ここもすれば良かったな」といったことがないように、スタッフで確認しながらやっております。

（12）介護トーク

戎：先ほどの介護トークございますが、私は、はっきり申し上げて、基本的には、会への参加者は、自分の介護を話したいのだと思います。実際問題、しゃべり出すと止まらないものですから。ですから、そのような時には、サインをその方におくります。最後は、そろそろ終わってほしいという方もいらっしゃいますので。ですから、それは工夫だと思います。

私が、今、一番困っているのが、先ほど、公民館活動と言いましたけれども、土曜日・日曜日でございます。これは、現役世代は休みでいらっしゃると思うんです。われわれ4木（よんもく）というのは平日の木曜日でございますので、当然、現役の方は来られません。どうにかして現役の方を、介護者をどうにかうまく会に導くようにできないだろうかと考えまして、土曜日・日曜日の公民館活動をしているのが現状です。しかし、いまだかつていらっしゃいません。必ず介護者はいると思うのですが・・。

先ほど、飲み会があるとありましたが、私どもは、今現在、食事会をやっております。私も、いまさらこういったことは言えないんですけれども、介護者は孤独で、毎日、日々、一人で生活していることが多いですから、食事会をしますと参加者が非常に多いんです。その後、たまたま私たちが食事会をする近くに認知症カフェがオープンしまして、みんなでそこに行くんです。コーヒー

1杯200円で話をしますけれども、会を増すごとに、だんだん、だんだん増えております。しかし、先ほどお話ししましたように、現役の介護者がいらっしゃらないというのが一番のネックなんです。この辺をどうにかしたいんですけれども。そういうことです。

司会：「現役」というと、お仕事を持っている方のことですね。お仕事を持ちながら介護されている方が全国に291万人もいらっしゃることを聞いて、非常にびっくりしたんです（総務省「平成24年就業構造基本調査」）。こういう方々の声は、地域で暮らしているんだけれども、私たちの集いとは少し距離があるのではないか、というお話でありました。この問題については、専門の方にご参加いただいていますので、後ほどお話を聞いてみたいなと思っております。戎さんと堀本さんへは「介護されている方々が主催者、運営されているんだけれども、ご負担は大きくないんですか」「どんな工夫をされているんですか」というご質問もあったんですけれども、いかがですか。

（13）介護者が集いを主宰する場合の工夫や負担

戎：私の場合、最初はどういうふうにしたらいいかが一番頭にありました。電話ではできません。相手方は介護中ですから、電話もできない、何もできないんです。いろいろ考えまして、ファクスやるしか手はないなと思ったんです。ファクスを流せば関係なく届きますから、それで連絡が取れるかなと思いました。現在では、会のホームページをつくりました。ごく最近ですけれども、パソコンをつっこう会ということで、勉強会をやろうかと思っています。それは、取りも直さず、こんなことを言ったら申し訳ないんですけれども、会の運営にいくらかプラスになればと、それで介護者同士が連絡を取り合って、いろいろな情報を交換し合う、また、そういったことにもつながるのではないかということで、今、考えているんですけれども。パソコンも、公民館ではインターネットは接続ですけれども、だけど、安佐南区は地域が広いものですから、特定の公民館でするというのは非常に難しいんだなと、今、悩んでいる最中でございます。ですけれども、公民館をうまく利用されれば、もっともっと良くなるのではないかという気がするんですけれども。私個人的な意見です。

堀本：私は、先ほども言いましたように、妻を在宅でみている関係で、非常に時間の制約があります。施設への送り迎えも自分の車でしていますので、余裕ができるのは大体12時から4時ぐらいまでです。私自身も病気を抱えていて、週に3回点滴を打ったりしながらお世話しているものですから、なかなか一人で背負い込むことができないので、今、60代で、若年の奥さまをみている方二人に世話人になっていただいています。家族の会としてやっているから、いろいろな世話人の方が関わっていただきます。参加の呼び掛けも、常勤で二人コールセンターにおられますので、その方たちが集いの前に呼び掛けたりしています。私も、電話したりしますけれども。確かに、介護しながらこういう活動をするのは負担が大きいです。しかし、介護者としての思いがありますから、どうしてもやっていかなければいけないなと思っています。60代の方が二人に関わっていただいていますので、随分と助かっています。宇土さんもコールセンターで関わってもらっています。いろいろな支援の輪がありますから、私一人でやっているわけではないので、少しずつ、少しずつ、もっと若い世代の人に引き継いでいきたいと思っています。

もう1点、いいですか。息子介護と夫介護ですけれども、最近の熊本の傾向では息子介護の人の参加が増えてきています。50代で仕事を辞めて、熊本に帰ってきてお母さんを介護している人が2～3人いますし、両親を介護している人もいます。配偶者の介護とお母さんの介護は思いが違うのだなと思います。小さいときから育ててもらったという長い歴史がありますから、あんなしっかりしていた母がどうしてこうなるのだろうという思いが強いようです。もっとしっかりしてもらいたいとの思いか高じて介護に行きづまり、死んでしまおうかと、思い詰めた方が多いです。

2. フロアとの質疑応答

司会：はい。ありがとうございました。ひとまず、質問用紙に基づく意見交換はこれで終わりにしたいと思います。私からも幾つか質問をさせていただいて、さらに内容を深めていこうと思っていますが、こういうやりとりを聞いて、もう一つ聞いてみたいなという方はいらっしゃいませんか。ありますか。では、後ろの方にマイクを持っていってもらいますか。

お名前と都道府県名をお願いします。

(1) ケアマネージャーの支援について

質問者：初めまして、静岡県静岡市からまいりました。非常に中身の濃いお話をたくさん聞かせてもらいました。

内容の2番の方ですから井出さんですね。ケアマネージャーの立場で支援をしていただいているということで、私の住んでいる静岡県静岡市では地域包括支援という活動があって、僕も介護者なので大変助かっています。地域包括のケアマネージャーの方と話をすると、最後は「時間がない」といわれる。「非常に忙しいオーダーが行政から来てしまって、もうお手上げです」ということをいつも聞くので、支援に即した仕事をどうしてケアマネジャーの方が率先してできているのかをお聞きしたいです。

井出：実は、私も三十数名の要介護者のケア支援を担当しています。あとは、主任介護支援専門員という役目もあるので、ケアマネージャー自身の指導もしなければいけない立場ではあるのですが、時間はどうにでもなると思うのですけれども。そんな答えでは、答えにはなりませんよね。例えばモニタリングをするときは、大概、来月の予定表をお持ちしながらの話になるので、月を半分に割ると15日以降は忙しくなるのですが、でも、そういうときがチャンスで、1対1で話をすることも恵まれる時間でもあるんですよね。時間を割いて、前半は割とサロンに出掛けたり、いろいろなことができるので、そこで組んだりとかしています。忙しいですよ。これで介護保険制度が変わるので、先ほども「忙しいね」と言っていたんですけれども。県の指導が入ったり、いろいろな

ことをする中で、集団指導が入る中で、これからも変わるので、介護者さんたちも大変になってくるのかなと思うんですけれども、時間は自分でつくるものかなと思います。うちは、局長が理解のある人なので、そういう課題が出たときは「どうしておまえたち、やらねえんだ」と言ってくれるから「じゃあ、私たち、堂々とやっていいんだ」と思って、活動できるんですけれども。こんなことでいいですか。

質問者：ありがとうございます。僕自身も、いろいろな包括の方と接しました。井出さんのような方と会いました。その方も、1日24時間を30時間以上使っているような人だなと思いました。その方曰く、おっしゃるとおりでしたね。時間が付いてきちゃった。その後、自分の時間をどんどんどん削られるのですが、これはしょうがないと。そうなると、まちの医師会、歯科医師会の方々が、その人を支援してくださるそうです。そうすると、ケアマネージャーの領域を飛び越えて、お医者さんがその方に「こういう患者さんで、こうなっているけれども、なんとかしてくれよ」。そうすると、お医者さんの診断書を行政に出してしまえば、要支援の方にはお墨付きが付いてしまいます。これは越権行為というか、えらい大変な部分しかないので、一人でそんなことをやっていたらいつかつぶれてしまいます。それが、一番心配です。後に付いている後輩が、なかなか育たないんです。私は、スピードアップしすぎているのかなと思いました。これも、僕は次の問題提起をもらったのです。でも、今現状では、時間はどうにでもなるのでしょうね。

司会：ケアマネージャーの個人的な資質もあるのでしょうけれども、その方の置かれている環境で随分と変わるのだと思います。ケアマネージャーの直属の上司もいらっしゃれば、さらにその方の上司もいらっしゃる。ケアマネージャーたちが働いている自治体の関係もありますので、複雑な環境の組み合わせによって、井出さんたちがあるんだろうと思うんですね。ケアマネージャーが私たちの一番身近にあって、一番の相談相手になっているのは事実でありますので、私たちがケアマネージャーさんたちを育てていくという発想で頑張っていきたいなと思っております。

あと、いかがですか、ご質問はありますか。はい、どうぞお願いします。

(2)「介護と仕事」「介護と家計」―生活困難を抱える介護者の課題

質問者：すみません、鳥取から来ました。具体的なことなんですけれども、40代の男性と50代の男性、母親と奥さんの介護なんです。その方たちと仕事のことで相談、協議をした中で、一人は、はっきり言えば鬱になってしまったし、一人は、これは大企業だったので、ある程度、介護休暇を取って介護していたのですが、その後、本人が「僕は、今ノイローゼ」と言って、今、求職中なんです。そういう形で対応をしているんです。皆さんの中で、具体的に、生活の維持とかの相談を受けて話をされたことがありますか。鬱になった息子、40代の男性のほうは、一緒に話をしながら、今、障害年金をもらって介護をしております。具体的に、どういう形で解決したらいいのかというのは、どんなものでしょうか。ただ、そういうことをしていいのかどうかは、私は今でも疑問に思っています。以上です。

司会：はい、ありがとうございました。今、仕事と仕事介護の問題が非常に社会問題化して、育児休業、介護休業制度の改定作業が始まっているように、政策的なテーマにもなっていますよね。現役世代、働いている世代の介護の問題にどう対応していったらいいのかが課題になっているということは、御代田町の井出さんの話がありましたし、戎さんのところでも話題になりました。

参加者の中に、野口明美さんという産業カウンセラーのお仕事されている方が東京からご参加されています。お仕事の中でも、介護と仕事の問題で悩んでいる方の話が随分多いことをお聞きしたんですが、どうでしょうか。

野口：初めまして。私は、会社は東京なんですけれども、京都に住んでおります。産業カウンセラーとして、企業でカウンセリングとか研修等を行なっております。ここのところ、介護に関する研修セミナーが非常に増えてきました。それも、特に男性が非常に増えてきて、去年の暮れから何本かやった研修で、介護に関する研修は、全部、男性だったんです。ちょっとびっくりしたんですけれども。それは、たまたまだと思うんですけれども、男性が増えていること

は間違いないです。

今、先生がおっしゃったような、働きながら介護をして鬱になるという方も、実際、たくさんいらっしゃいます。そういったときに私どもが対応するんですけれども、まず介護に関する情報を提供して差し上げます。どういったものがあるんだとか、それをどういうふうに使えばいいのかということを、情報提供も一つの大事なことかなと思います。実際に、介護休業は、今、93日ですが、そこをいっぱいいっぱい休んでしまうよりも、私たちは、その前に、何らかの介護のシステム、ケアマネージャーとか包括支援とかを使えるだけ使って、できれば鬱にならないようにすることを私たちは心掛けております。実際に、そうなっていらっしゃる方は、具体的にすぐ返事は思い付かないんですけれども。

あと一つ、戎様でしたか、土日に現役の介護者がなかなか来られないということなんですけれども、私の推測なんですが、一つは、土日は自分のために休みたいとか、土日も介護にというのもあるんですけれども、それ以前にご存じないということはないでしょうか。アナウンスをどのようにされているのかなと思いました。

戎：私のほうで、公民館活動しています。その中で、身近に介護に関する関心のある方は、当然、来られるわけで、その中に男性の介護者もいらっしゃるんだと私は思っているんですよね。だけれども、私のほうに連絡がないというのはなぜなのか。私も、個人的に、いろいろなところで、いろいろなお話をしていますけれども、そういった声が掛からないのはどうなのかなという思いがあるんですけれども。

野口：私も、先ほど言いましたように、研修とかセミナーで男性があまりにも増えてきているので、男性介護者の会があるんだよということを、この前からあちこちの企業様で開示しているんです。そういう話をしたら、結構どよめきが起こるときもあるんです。ということは、ご存じなかったのかなと思いました。私も、こういう会に参加させていただいて、アナウンスする立場をやらせていただけたらと思っております。それと、実際に行かなくても、こんなものがあるんだっていうことで、それを切り抜いて持ってお帰りになった方もい

らっしゃいました。なので、もし行かれたら、よろしくお願いいたします。

(3) 介護者の健康問題

司会：はい、ありがとうございました。先ほどの鳥取の阿部さんからのご質問があった、そういう生活に関わった方々の参加とか、あるいは相談とか、そういうご経験は、皆さん、どうですか。

井出：つい先月のことですけれども、隣町の人がなぜか御代田の社協の私どものところに来てくれました。その時は偶然、事務所に私しかいなかったので話を聞きました。その方は、やはり鬱状態でした。私の職業柄「あなた、ちょっと、鬱状態になっていますよ」とはっきり言いました。息子さんでした。息子介護で、ある精神科医にかかっているんだけれども、どうにも埒が開かないということで、お母さんに手を出すことができないから、自分のうちの壁に穴を開けてしまったということを実際に聞きました。私が信頼している精神科医の佐久総合病院という、農民医療で全国的に有名な病院に、認知症の専門医がいらっしゃいます。ときどき先生からも電話を頂くくらい交流しているんですけれども、その先生を紹介しました。どちらかというと、本人の認知症の診断というよりは、ご家族の心を元気にしてもらえる先生なんですね。1時間以上かけて話をしてくださるので、多分、元気になるかなと思い紹介しました。隣町の方なので、「まずは、そこの包括に相談や介護保険申請に行ってください」と言って、そこの包括の担当の方には私からつないだんですけれども。早速、行ったそうです。どうしているかなと思っていましたら、先週ですが、私を訪ねてきてくれて、とてもにこにこして「おかげさまで、病名も分かりました。こういうふうにしました」と尋ねてきてくれ報告をしていただきました。こういう事から、まずは、勇気を持って相談にきていただけるといいのかなと思います。

あとは、生活の維持をしようとすると、ケアマネが考えるところでは、ショートステイとか、最近、私たちの「地域の縁側」というのができたので、そこではオレンジカフェもやっているので、当事者さんと一緒にお茶を飲みに来てもらって、社会交流してもらったり、とにかく家にこもらないので、出掛けるよ

うなきっかけをつくってあげるとどうかなと思っています。でも、実際は、出掛けてこない方が問題なんですよね。こうやって来ていらっしゃる方は、多分、まだ力がある方なんですけれども、それは私も課題に思っています。どうやって掘り起こそうかなというか、引っ張り出そうかなというのは思っています。

(4) 家族・介護者支援の必要性

堀本：これは、私自身の体験ですけれども。今、おっしゃったように、医療のほうで、もう少し家族に関わっていただく先生がおられると、介護家族は随分と救われるのではないかと思います。私も、5年前に肝臓がんで入院している間に、家内が徘徊したりして非常に荒れた時期があって「精神科に入院させないと駄目ですよ。」と、私の主治医から言われました。そのとき出会えた先生が私の話を1時間以上聞いてくださいました。家内は、先生の前に5分もいなかったのですが、私の思いをずっと聞いていただいて、気持ちが楽になりました。その先生から「認知症の場合、薬とか医療が関われるのはせいぜい2割ぐらいですよ。あとは、家族の方がいかに関わるかで進行が緩やかになります。」と言っていただきました。その先生から家族の会の集いを教えてもらいました。家内の病状も、薬の処方を変えていただいたら、ものすごく落ち着いてきました。私自身も、そのときは鬱状態だったと思いますが、随分と気が休まりました、それから2週間ごとにその先生のところに通い、よく話を聞いていただきました。認知症は、進んでいったら本人の診察はなかなか難しくなると思います。家族の話を聞いて、今の状態を判断していただくことが必要ではないかと思いますが、それだけ時間をかけて家族の話を聞いていただく先生はなかなか少ないですね。

司会：ありがとうございました。家族介護者支援という大きなテーマにつながるお話だったと思うんですけれども。介護保険制度もそうなんですけれども、介護される人への関心は非常に高くなったんですけれども、一緒に暮らしている家族は、介護者になって当然だし、介護する人なんだという当たりの見方なんですけれども、もしかすれば介護される人も、介護する人も、支援の枠組みをつくっていかないと今の在宅介護は成り立ちませんということを、多くの方

が言っているし、そこに苦しみの根源があるのではないかという気がするわけです。介護される人の健康があって初めて在宅介護が成り立ちます。介護される人が幸せでなければ、される人も幸せになれないということを、事実を持って示しているのだろうと思うわけです。このことを私たちの男性介護ネットは声を大にして主張しているわけですけれども、このことに多くの関心が集まるような取り組みが、今、一つも、二つも、工夫を持って進めていくことが大事かなと思いました。

時間も少なくなりましたので、私ほうから幾つかお聞きしたいことがありますので、それらをお聞きしていこうかなと思っています。質問用紙の中にも、実は私が聞きたいことを書いていらっしゃる方がいて、これを非常に参考にしながら1個、聞こうと思うんですけれども。介護者の集いで、参加された人はどんなことを話しているのですか。どんな話、どんなテーマが一番盛り上がっていますか、これが一つです。ちょっと4人の皆さん方にマイクを回してもらえますか。どうぞお願いします。

(5) 会や集いが沸騰する「話題」「テーマ」

堀本：最初は、固くなって話されますが、だんだん回を重ねることに、他人に話せない排泄の失敗とかの話でものすごく盛り上がることがあります。「排便の失敗や排尿の失敗をこれだけ笑いながら話せるのはここだけだ。友だちに話しても「それは大変だね。」と言ってくれるけれども、本当の大変さは介護した者でないと分からない。」という話がよく聞かれます。それから、若年の方を介護しておられる人は、先々どうなるのだろうかと気にしておられます。つどいには、それぞれの段階の介護者が参加されるので、各段階ごとに経験した人の話を聞くことができます。

司会：ありがとうございました。排便の問題は「排便、大変だよね」という話と「どっさりと出たので、うれしかった」という話を、皆さん、よくやっていますよね。便にまつわる話は、介護者の中で非常に盛り上がるテーマかもしれません。あるいは、共感し合えるテーマだということなんでしょうね。先々の見通しの問題もそうですよね。始まったばかりの人もおれば、20年、30年選

手もおれば、そういう人たちの交流を深める中で、先々の見通しが持てるし、その人の悩みの声に少し応えてあげたい気持ちにもなるという、教えたり、教えられたりという関係が、多分、盛り上がっていく一つの要素になっていくのでしょうね。戎さん、どうですか。

戎：私のほうも全く同じです。要介護１から始まって、一番高いものは要介護５になります。ですから、その段階が、皆さん、一番関心があります。家族に認知症のない方がオブザーバーで来ております。そういった方々は、当然、認知症について、私どもの話し合いの中でそういった話題が出るわけで、その辺が一番関心があることで、皆さん、聞いておられます。要介護２～３ぐらいだと健常者と変わらないわけで、徘徊が始まりますとなかなか大変ですよね。だけど、要介護４とか５になりますと寝たきりです。４とか５の方は「お宅は、またまだいいよ。口げんかするぐらいが華だよ」と言われます。その段階を越えた方ですから、それなりに判断もできるわけです。要介護１とか２にとっては、それを聞いて、だんだんと進行が見えてくるところが、皆さん、非常に参考になり、また盛り上がってきているような状況です。以上です。

(6)「介護感情の両価性」への気付きの支援

司会：ありがとうございました。なお、今のも分かりますよね。「大変だ、大変だと言っているうちが華だよ」ということは、大変さと、あるいは希望になるようなものが裏表であるという。私たちはこのアンビバレントな感情を「介護感情の両価性」といって活動の中でも随分と強調してきました。そこがきちんとサポートできるかどうか、あるいは援助者が、介護生活の辛くて大変な中にある希望に連なるようなこととでもいうようなその「気付き」への関わりができるかどうかは、大事なテーマなのかなと思いました。井口さん、どうですか。

井口：私たちの会は、現役でやっている方たちが少なかったりするのです。先ほどもお話ししたように、認知症の奥さまを介護されている方が入ってきて、その方が、日々、変わる奥さまの話をして、自分が変わっていく姿を聞いて「な

るほどな。頑張っているな」と思いました。最初は混乱したり、不安だったりしたのが、だんだん、そういうものだと悟りを開くお姿に、感銘を受けたり、教えていただいたりというところが、今、盛り上がっているところです。先ほど申し上げましたけれども、最後はお金というか、次第に、亡くなってしまった後の相続というところで、どんなふうにしていったらいいのか、どんなふうにするべきなのか、まだしっかりお話はできていないのですが、そういうところではみんな興味津々という感じです。いつかそういう話をしたいなとは思っているんですけれども。やはり、人生はお金ですからね、そういうところで盛り上がっております。

司会：はい、ありがとうございました。排便のこと、先々の見通しのこと、先立つ物はお金だという、あと何かあるのでしょうか。井出さん、どうですか。

井出：本当に、男性介護者さんたちの一言、一言に、私たち感動してしまうんですけれども。胃ろうで介護5の方を在宅でみているおじいちゃんがいる一方、徘徊で困ってしまったり、「夜間、トイレに起きて大変なんだよ」というような会話を傍らで聞いていますと、介護5の寝たきりの奥さんをみている人は「妻のそういう状態（徘徊とか、トイレ介助とか）を、何年も見たことがありません。私にとってはそのような状態は逆にうらやましいです」と話されます。こういうのが大切なのかなと思いました。そういうのを傍らで聞いていて「ああ、いいな」と思わず泣けてくるような場面もあります。こういう気付きは、私たちが支援できるものではなくて、介護者同士だからこそ言い合えるものかなと思って、傍らでそっと聞いています。

司会：いい話ですね。あと、盛り上がっている話はないですか。こんな話で盛り上がります。会場の皆さん方は、ないですか。こんな話、はい、どうぞお願いします。次々に出てきます。こういうのが、発言したくなるという、自分の情動をかきたてるという場面は大事ですね。

(7) 介護者目線での支援

会場：私は、現役時代は福祉事務所に長いことおりました。現役をリタイヤした後、ある総合病院で何年間か、MSW といいますか、医療ソーシャルワーカーをボランティアでやっていたんです。そのときに、あと 3 カ月で 100 歳になるというおばあちゃんが入院してきたんです。別に、どこがどう悪いということではないんですけれども、私は認知症という言葉はあまり好きではなくて、言葉は悪いですけれども、言うときは「ボケ」と言いますけれども。本当にボケボケで、目を開けていても、何もせずに、治療することがないので、栄養補給だけ鼻中でやっていたんです。そのおばあちゃんに対して、医師と師長に「何とかならないでしょうか」と言ったら「見てみましょうか」といって、見たら、確かに、ぼーっとしていました。上から目線ではなくて、ちゃんとしゃがんで同じ目線でやって、体に体に触って、揺すって「おばあちゃん、おばあちゃん、何かない。何がしたい？」と言ったら、ちゃんと答えてくるんです。「帰りたい」と、一言、言ったんです。「分かった」と言って、それで子どもさんを呼んで、話をしました。子どもさんが、私の親の年代なんです。99 歳、100 歳ですので、息子さんが 80 ちょっとなんです。孫が、私とほぼ同世代なんです。実際には、今、ひ孫が世帯主をやっているということで、親子 5 世帯の所帯です。「なら、何とかしようか」ということで、大至急、家の改造か何かを 1 カ月近くやって、地域連携で地域のお医者さん、それから介護支援施設と協力して、本人と話をしたら、3 日後にはご飯が食べられるようになりました。1 カ月後、家に帰るときには、ちゃんと目が合って、ものが言える、話ができるになりました。「おばあちゃん、100 歳のときはいっぱい下げて行きますので、呼んでくださいよ」と言ったら「必ず来てくださいよ」と言って、手を振って帰りました。102 歳と 8 カ月か 9 カ月まで生存しました。家に帰って約 3 年、生存していました。認知症も、治らないですけれども、ボケボケ老人ではなくて、人として、人間として対応、きちんと応えてくれるのがはっきり分かりました。

私は、今、難病、それからがんの患者の集いも一緒にやっていますので、その中で皆さんと同じ目線で話をするようにしているんです。そうすると、認知症になった人も顔つきが違ってきます。そういうことを感じています。今日、皆さんの話を聞きながら、ちょっと上から見ているように感じて、そのことを

ちょっとだけ書かせてもらいました。すみません。同じ目線できちんと対応すれば、認知障がいくら進んでいてもちゃんと応えてもらえると私は思いました。

司会：はい、ありがとうございました。先ほど、手を挙げていた方、こちらにお二人いらっしゃいます。

会場：東京町田から来ました。どんなことで家族間が盛り上がるかということが、津止先生からあったと思ったので、盛り上がるというのはちょっと違いますけれども、ここでしか話せない話というのを二つお話しします。一つは、在宅でしている人で、ケアマネ、あるいは訪問看護、それから「こうなんだけれども、こういうときはこれでいいの」という、非常に具体的な話が出ます。例えば、施設に頼る場合には「施設に行ったらこうで、あなたのところのお母さん、お父さん、だんなさん、奥さんは手がかかるから、どこどこの病院へ行って、この薬を出してもらいなさい」ということを責任者から言われて「もらいに行っていいですか」と、そういう話が出ます。私は、個人的には認知症になった母を在宅介護と施設介護で、介護保険が始まる前に看取ったんですけれども、20年ぐらい現場にいるんです。そうすると、あの病院の婦長さんと、あそこの施設の責任者は、身内言葉ですけれども、できているから、ちょっと自分たちの手に負えなくなると、これこれの薬を処方してもらうようなルートがあることが、うちでは具体的な固有名詞があって、どこの病院の施設長がどう変わればどうというのも、25年のデータがありますから、どこにも出しませんけれども、われわれの世話人、3人、4人の頭の中に入っていますので、そういう話をすると「そんなことは、夢にも思わなかった」という形になります。「それだけではなくて、代わりに、こうしたらいい」というところまで、一つの方法ということになって、結局、窮地を脱します。「薬をもらって、首ががくっと落ちて、何も反応がなくなったという例があったけれども、おかげさまで治りました」とか、そういうのが、盛り上がるのとはちょっと違いますけれども、うちの家族会は全く家族だけで、ほかのケアマネとか行政職とか介護職とかの人は一切入っていませんから、そういうところでないと出ない話ということで、知る人ぞ知るという形になっています。盛り上がるとはちょっと違いますけれ

ども。

司会：はい、ありがとうございました。介護者目線での情報の交流ができる場というところですよね。事業評価もあるということでした。前席の方は、どうですか。

会場：大阪箕面市の男性介護者の会です。両親を大阪で介護しているのですが、東京目黒区で兄の介護もしていますので、行ったり来たりで、今日は東京から来ました。男性ならではのということの一つは、ケアリーホームのお話です。20万円で、2万円の助成で、うちも工事を2回やりました。廊下が長いとか、トイレとお風呂をやると大体お金が足りなくなってしまうんです。そうすると、トイレまでの廊下はどうしようと。そうすると「ホームセンターへ行くと、980円で手すりが売ってるよ」とか、そういうことを言われます。女性だと、買ってきて付けるという話にはなかなかならないかと思うんですけれども、男性の会ですと「あそこで売っているから」とか、付け方の説明をして、そういうお話がちゃんとできることこが、男性介護者の会で良かったところかなと思っています。

それから、お酒の話で、先ほどの介護バーの話なんですけれども、目黒のうちの近所に介護バーがあるんですけれども、そこは遠くからでもそういう話で盛り上がっています。現に、横浜から来ている人もいます。大阪でも「そういうのがあるといいね」と言っているんですけれども、何せ、大阪箕面市は50平方キロくらいあるので、とても送迎は無理だということでした。タクシーに乗っても結構なお金が掛かってしまうので、酒を飲む会をやるのもなかなか難しいなと、交通便が悪いので困ったものだなと思っているんですけれども。

あと、もう一つ、男性の会で、先ほど、壁に穴を開けてしまう人がいたという話があったんですけれども、実際、奥さんを殴ってしまう人がいるんですね。そういう話は、女性もいる会だと大非難になってしまうので、男性だけの会だと「ああ、その気持ち、分かるな」という感じで言えるので、複数の方がそういう話を吐露していただきました。「おまえは、よく殴らずにいられるな」とか、そういう話によくなっています。

Ⅲ．ケアメン・コミュニティのマネジメントと支援の課題
―シンポジウムのまとめにかえて―

コーディネーター　津止　正敏

ありがとうございました。こうやって聞いていくと、もっともっと中身のある、深みのある議論になっていくと思いますが、残念です。時間がないんですね。私、ほかにも、例えば「どういうイベントが求められていますか」とか、あるいは「皆さま方が運営しているときに、世話人のなり手がいないんだけれども、どういう方々が世話人として活動していますか。その世話人の活動内容にはどんなものがありますか」ということも教えてほしいなと思ったりします。あるいは、主催団体の対応で、夜の部の交流会で少しお話しいただいたらいいと思うんですけれども、今日、発表頂いたところは、家族の会が立ち上げたところもあるし、行政の健康長寿課や社協さんがやっているところもあれば、医療生協の老健施設がつくったところもあります。全国にはほかにも、地域包括支援センターがやっているところもあれば、NPO が主催しているところも、男女共同参画センターが立ち上げているところもあります。男性介護者の会や集いの動機も、きっかけも、ものすごく多彩になっています。目的も多様ですよね。「虐待防止のための男性介護者支援」と言っている福祉分野もあれば、「男性の新しい生き方モデルだ」と推奨している男女共同参画センターもあります。問題を起こしそうな介護者としての男性の見方と、いや、時代の先端を走っている男性の姿という、こういう両極端な評価で会や集いを行なっている団体もあります。そういう多様な実態を考えますと、私たちの男性介護者と支援者の全国ネットワークが提案している、介護している男性たちの声に耳を傾けよう、介護体験を語る機会をたくさんつくっていこう、そういったところは今の時代に最も必要な領域なのかなと思ったりもするわけです。ぜひ、皆さん方の地域の中でも、その地域の実情に応じた取り組み方を強化してほしいと思っています。

それから、支援の問題でいろいろ出ましたけれども、先ほどのお話を聞いて、介護している男性たちを支援しようとする、あるいは働きながら介護している

方々を支援しようとするときに、もう単体の支援策ではほとんど間に合わない時代だと思うわけです。単体の支援策では間に合わないんです。いくつもの単体の支援策を組み合わせて支援をしていくようなコーディネートの役割、私は支援策の「カスタマイズ」と言っているんですけれども、標準化されたいろいろな制度を幾つも集めて、それをその人に合わせたように修正していくというか、カスタマイズしていく、そういう取り組みをしないことには、今、私たちが抱えている問題はなかなか解決しないのではないかと思います。むしろ、私たち専門職もカスタマイズ能力に欠けているし、私たち自身も知らないです。いろいろな制度があるけれども、それを組み合わせていけばこんなこともできます。あるいは、こんなことを少し修復していけば、こういう新しい支援もできますということを、段階的に考えていくことが大事かなと思います。

明日（2015年3月8日）、男性介護者と支援者の全国ネットワークの総会を午前中に開いて、午後には記念講演を開くんですけれども、そのときの資料で、京都府の「仕事と介護両立支援ガイドブック」というパンフレットを提供します。これは京都府の男女共同参画課がつくったガイドブックなんです。男女共同参画課が仕事と介護の両立支援のガイドブックをつくったというのが、みそなんです。それは、介護保険の担当課でもない、雇用の担当課でもない、男女共同参画のセクターが仕事と介護の両方にまたがるような支援策を考えてガイドブックをつくったということです。行政のほうでも、厚労省の育児と仕事の両立支援は、雇用均等・児童家庭局という一つの局の中で成り立っているんです。仕事と介護の分野は、仕事の分野は雇用均等の局でやり、介護の分野は老健局でやります。厚労省の枠の中で、仕事と介護の分野は別々の局が担当していて、それをすり合わせて一つのものをつくりあげていくことになっていないので、育児の分野に比べたら随分遅れているのだろうなと思ったりするわけです。せめて、私たちは、仕事と介護の分野を言おうとすると、育児期なみの支援策、40代、50代、60代の中高年の男性たち、あるいは女性たちも含めてですが、仕事と介護の両立を必要としている方々には育児期なみの支援策が必要だと思います。育児期なみの支援策というのは、働き方を支援することと、保育を支援するという、この二つが接続され、組み合わされた支援の仕組みです。育児休業があるだけでは事足りない、あるいは、保育所があるだけでは事足り

ないんです。その二つが合体されて、お父さん・お母さんの働き方を支援し、子どもたちの保育をしっかり保証していこうということです。

介護の分野でも同じだろうと思うんです。介護休業だけで私たちの仕事と介護の両立がなりうるはずもないんです。介護サービスだけで仕事と介護の両立支援がありうるはずがないです。その両方が相まって、初めて私たちが求めていくような方向性がきちんと出せるんだなと思います。そのことを少し整理しながら問題提起をしていくことが大事かなと思います。私は、支援の組み合わせ策、支援の組み込み方ということで考えて意見の発信をしている最中です。そのことについても、皆さん方と一緒に検討できるような場をつくってみたいと思っているわけであります。

今日は、2時から始まって3時間、一体どうなるものかと思ったんですけれども、皆さん方のご協力のおかげで、実り多いイベントになったかと思っております。4人の発表の方々も、フロアの皆さま方のご質問にも随分答えていただきました。私たちの結論は、誰かが正解を知っているわけではないのです。正解がどこにあるかすら分からないです。私たちの活動一つ一つが正解をつくっていくための材料になっていく、そういうふうに思っているわけです。だから、この世の中に正解があって、誰かが正解を指し示してくれると思ったら大間違いです。正解は、まだないんですから、私たちは一つ一つの活動の元にして正解をつくろうとしています。そういった途上にあることだと思って、ぜひ、皆さん方のお力をこの分野に集中していただけたらありがたいと思っているわけであります。

今日、この後、5時半から下の6階で、全国の介護する男性たちが語り合う会、交流会を予定しておりますので、そこでもこのイベントに引き続きいろいろな知恵を出し合って、交流しようではないかと思っていますので、ぜひご参加いただけたらと思います。事前予約でお申し込みを受け付けておりますので、ぜひ、3,000円をご持参いただいて、6階まで足を運んでいただきたいと思います。

3時間、長い時間になりましたけれども、本当にあっという間に、語り尽くすことができないほどの、また皆さん方もいろいろお聞きしたいこともたくさんあったかと思いますけれども、それもできずに終わってしまったことを非常に申し訳なく思っているわけですけれども、ひとまず今回のシンポジウムはこ

れをもって終わっていきたいと思います。4 人のご報告者の皆さま方、どうもありがとうございました。

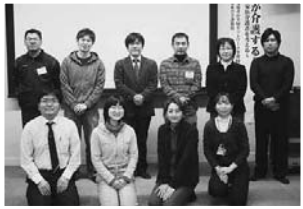
今日は、本当に多くの皆さま方に参加いただいて、東京、埼玉からも来ていただきましたし、九州からも、宮﨑からいつものとおり河野さんご夫婦にも来ていただいて、本当ににぎやかなイベントになりました。

最後までお聞きいただきました皆さま方にも、心から感謝を申し上げたいと思います。このアンケートに必要な事項を書いていただきまして、できれば皆さまのご意見を私たちのホームページに載せたいと思いますので、掲載が可能かどうか、お名前を乗せてもいいかどうかお願いします。それでもって内容を豊かにしていきたいと思いますので、ぜひ、ご提案、ご意見をお聞かせいただきたいと思います。よろしくお願いします。

資　料

男性介護ネット５周年のあゆみ

年	ネットワークの活動	ブロック（地域）での活動
2009年度（2009年3月～）	■３／７　設立プレイベント（立命館大学末川会館レストランカルム） ■３／８　呼びかけ人会議・総会（午前） 男性介護者と支援者の全国ネットワーク発足会、 記念講演：「男こそ名介護者になれる～男性介護者ネットへの期待～」 社団法人認知症の人と家族の会代表理事　髙見国生さん 立命館大学末川記念館１階講義室 150名が参加 **【2009年度総括】** ■第１回男性介護者介護体験記募集（08年12月～09年１月） ■入会案内リーフレット作成（15,000部） ■ホームページの運営開始 ■通信１号～３号発行 ■会員No.435 ■第１集男性介護体験記発行（152通） ■第２回男性介護者介護体験記募集 □様々なイベントやマスコミでの報道を契機に会員数は発足時150名が１年間で400名に達する団体となる	10／10　「男性介護者交流会」in長野（シルバーバックの会） 講演「語り」がもつ力 帝京大学地域看護学准教授　吉岡幸子さん 11／７　「男性介護者のつどいinあらかわ」（荒川おやじの会） 12／６　「家族介護を考えるつどいin東京」（東京都社協）
2010年度（2010年3月～）	■３／６　１周年記念協賛企画　男性介護者研究会シンポジウム テーマ：「家族介護者支援の現状と課題―国際比較の観点から―」 立命館大学　創思館カンファレンスルーム ■３／７　第２回総会　立命館大学以学館１階１号ホール 結成１周年記念式典 基調講演：「介護が教えてくれたこと・夫婦のあゆみ」 長門裕之さん（俳優） **【2010年度総括】** ■会員No.560（46都道府県に会員） ■第３回男性介護者介護体験記募集 ■第２集男性介護体験記発行（148通） ■会員調査（９月実施、140名） ■通信４～６号発行 ■男性介護資料集―介護の扉を開く第１集（10年４月～11年３月）発行 ■「オトコの介護を生きるあなたへ」（男性介護ネット編）出版 ■男性介護者支援啓発リーフレット「ひとりじゃない。生きる勇気がわいてきた。」の作成 □地域での男性介護者交流会・つどいの広がり □男性介護者を取り上げるメディアの増加	10／９　「男性介護者交流会」in長野（シルバーバックの会） 「全国の男性介護者がつながる・広がる！」 65名参加 11／20　第１回九州ブロック交流会 秋、マレットゴルフで集まるシルバーバックの会の会員（長野県上田市）
2011年度（2011年3月～）	■３／12　男性介護ネット２周年協賛企画　男性介護者研究会シンポジウム 基調講演：「家族であること　介護すること―在宅と施設のあいだで―」 早瀬圭一さん（毎日新聞特別編集委員、北陸学院大学副学長） 立命館大学以学館 ■第３回総会（３／13）立命館大学創思館カンファレンスルーム ２周年記念式典 「ひろげよう男性介護者の居場所つくり」 基調講演：荒川不二夫さん（男性介護者ネット代表） **【2011年度総括】** ■会員No.654 ■第４回男性介護者介護体験記募集（12年２月～３月） ■第３集男性介護体験記発行（137名） ■通信７～８号発行 ■男性介護資料集―介護の扉を開く第２集（11年９月）発行 ■男性介護者の介護実態と支援の課題―男性介護者ネット第１回会員調査報告書―（11年９月）発行 □「介護と仕事と暮らし」ケアメン　プロジェクトの実践 □会員からの提案を受け「体験記の贈呈代行サービス」の実施	８／28　「男性介護者交流会」in長野（シルバーバックの会） ９／３　第２回九州ブロック交流会 ８／４　第１回男性介護者支援ひょうごネットワーク 滋賀県男性介護者のつどい

2012年度（2012年3月～）	■3／2　男性介護ネット3周年協賛企画　男性介護者研究会シンポジウム「介護と仕事の両立　今何が問われているか―ケアメン・プロジェクト―」 基調講演：「介護と仕事との両立をめぐる現状と課題」 沖藤典子さん（ノンフィクション作家） 「京都市における介護と仕事との両立実態調査報告」 斉藤真緒さん（立命館大学准教授） ■3／3　第4回総会 結成3周年記念式典 「つながる力　男性介護者『ケアメン』コミュニティ“此の岸のこと”」 外山文治さん（映画監督） 基調講演：「提言！私たちの家族等介護者支援法」 堀越栄子さん（日本女子大学家政学部教授、日本ケアラー連盟代表理事） **【2012年度総括】** ■会員No.754 ■第5回男性介護者介護体験記募集（13年3月～5月） ■第4集男性介護体験記発行（78名） ■通信9号発行（12年7月） ■広報啓発チラシ「介護退職ゼロ作戦」の発行（1万部） ■「『介護退職ゼロ作戦』という社会運動」1000部発行 ■11／11　介護退職ゼロ作戦！　フォーラム2012 「介護で退職しなくてもいい社会を創ろう！―あなたの介護体験を社会の共有財産に」 基調報告：「介護退職ゼロ作戦！」 津止正敏さん（立命館大学教授） 全体助言者：池田心豪さん（独立行政法人労働政策研究研修機構副主任研究員） □組織強化とひろがり、多団体とのネットワーキング 地域での会づくり、集い活動の発展、県域・広域ネットワークの構築 北信越・北陸ブロックが立ち上がる	10／21　第3回九州ブロック交流会　38名参加 11／1　第2回男性介護者支援ひょうごネットワーク 11／3　男性介護ネット交流会in　長野（シルバーバックの会） 「結ぶ！つながる！介護の縁」 牧野史子さん講演（NPO法人サポートネットワークセンターアラジン代表） 11／17　北海道男性介護者の集い交流会 11／23　第24回KYOあけぼのフェスティバル2012ワークショップ 「介護退職ゼロ作戦！―介護と仕事との両立支援」 12／9　家族介護を考えるつどい「3／11そのとき介護者は」（東京都社協） 2／24　第1回北陸ブロック結成フォーラム  韮崎やろうの会発足記念会（山梨県）
2013年度（2013年3月～）	■3／9　男性介護ネット4周年協賛企画　男性介護者研究会シンポジウム「介護と仕事の両立―大介護時代を生きるために―」 基調講演：「大介護時代を生きる」樋口恵子さん（高齢社会をよくする女性の会理事長・東京家政大学名誉教授） ■3／10　第5回総会（150名参加） 結成4周年記念式典 「介護退職ゼロ作戦！介護しながら働き続けられる社会へ」 講演：「ペコロスの母に会いに行く」 岡野雄一さん（フリーライター・漫画家）、聞き手・木下悟さん（西日本新聞編集委員） **【2013年度】** ■第5集　男性介護体験記発行（61名） ■11／16～17　ケアメンサミットJAPAN Ⅰ 11／16　全国のケアメン・グループ交流会　コープイン京都 11／17　全国のケアメングループ代表者交流会（午前） 「介護退職ゼロ作戦フォーラム　2013」（午後） 基調講演：「男性介護ラッシュが職場を変える」 渥美由喜さん（㈱東レ経営研究所） □「介護離職ゼロをめざすための要望書」を厚生労働大臣に提出（賛同者に事務局長名）13年9月 □男性介護者と支援者の全国ネットワーク団体実態調査（88団体）	10／20　第4回九州ブロック交流会 10／26「男性介護者交流会」in長野（シルバーバックの会） 講演：「介護と仕事―介護退職ゼロをめざして―」津止正敏さん（立命館大学教授） 男性介護者の介護体験の番組が多く制作されるようになった
2014年度（2014年3月～）	■3／8～9　ケアメンサミットJAPAN Ⅱ 3／8男性介護ネット5周年企画・男性介護研究会シンポジウム 基調講演：「男性支援の可能性」伊藤公雄さん（京都大学教授） 3／9第6回総会（150名参加） 結成5周年記念式典 基調講演：「ケアメンのこれから」樋口恵子さん（NPO法人高齢社会をよくする女性の会代表）	 5周年記念式典前夜祭でのファッションショー（2014年3月8日）

男性介護者と支援者の全国ネットワーク会則

（名称）

第１条　本会は、男性介護者と支援者の全国ネットワーク（略称:男性介護ネット）という。

（所在地）

第２条　本会の所在地は下記におく。

〒603-8577　京都市北区等持院北町56-1

立命館大学人間科学研究所気付

（目的）

第３条　本会は、男性介護者と支援者の全国的なネットワークづくりを行い、介護する側もされる側も、誰もが安心して暮らせる社会を目指して、男性介護者の会や支援活動の交流及び情報交換の促進を図るとともに、総合的な家族介護者支援についての調査研究や政策提言を行なうことを目的とする。

（会員）

第４条　本会の会員は、本会の目的に賛同し、本会の活動に参加する男性介護者の会や支援者の会（設立準備会を含む）及び個人とする。

２　会員は別に定める会費を支払う。

（賛助会員）

第５条　本会の目的達成のために協力する個人および団体は賛助会員となることができる。

２　賛助会員は別に定める賛助会費を支払う。

（活動）

第６条　本会は、会の目的を達成するために次の活動を行なう。

⑴活動の交流

⑵情報の収集・発信

⑶政策の提言

⑷調査・研究

⑸その他、会の目的の達成に必要な活動

（総会）

第７条　本会の総会は、代表の呼び掛けにより年１回開催し、出席した会員の過半数をもって議決する。

２　総会での議決事項は次のようなものとする。

⑴活動方針・報告

⑵予算・決算

⑶役員の選出

⑷その他必要な事項

（役員及び事務局）

第８条　本会には次のような役員を置く。

⑴代表　　１名

⑵副代表　　若干名

⑶事務局長　　１名

⑷運営委員　　若干名

⑸監事　　２名

⑹顧問　　必要に応じて

２　役員の任期は１年とする。ただし、再任を妨げない。

３　本会に事務局をおき、事務局員は事務局長が任命する。

（会議）

第９条　本会は、総会の活動遂行のために次のような会議を必要に応じて開く。

⑴総会決定の具体化や総会議案など重要議案を起案するための役員会議（代表・副代表・事務局長・運営委員）。

⑵本会の日常の運営を執行するための３役会議（代表・副代表・事務局長）

⑶本会の日常の事務を執行するための事務局会議（事務局長、事務局員）

⑷上記、何れの会議も文書審議も可とする。

（財政）

第10条　本会の財政は会費・賛助会費・寄付および事業収入等でまかなう。

２　会計年度は4月１日より3月31日までとする。

（付則）

この会則は2009年3月8日より発効する。

2010年7月7日　所在地移転

別表

会費	・個人一口1,000円 ・団体一口3,000円
賛助会費	・一口10,000円

インクルーシブ社会研究 10
Studies for Inclusive Society 10

ケアメン・コミュニティのマネジメント

Management of Male Caregivers' Community

編集担当：津止 正敏

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
「インクルーシブ社会に向けた支援の＜学＝実＞連環型研究」
社会的包摂に向けた伴走的支援の研究チーム

2016年２月５日印刷　　2016年２月20日発行

発　　行　　立命館大学人間科学研究所
http://www.ritsumeihuman.com/
〒603-8577　京都市北区等持院北町56-1
ＴＥＬ（075）465-8358
ＦＡＸ（075）465-8245

印　　刷　　株式会社　田中プリント
〒600-8047　京都市下京区松原通麩屋町東入
ＴＥＬ（075）343-0006
ＦＡＸ（075）341-4476